

2019 年度春季短期研修報告書の発刊にあたって

国際教育センター長 棚橋 訓

2019 年度春季の海外短期研修派遣プログラムに参加した本学学生の研修報告書の発刊を、万感の思いを以って、迎えています。

2004 年に英語語学研修に限定して本学の海外短期研修がスタートして以来、2019 年度春季の研修は、これまでとは大きく異なる状況下での、そして、おそらく先例を見ない状況下での実施となりました。期せずして、2020 年 1 月後半から徐々に顕在化し始めた新型コロナウイルス感染症がこれから世界規模で拡大し始めるのか否か、正しい判断が何なのかを見極めること自体が大変に困難な時期に当たってしまったからです。

感染・拡大予防への熟慮の末の参加の見送り、研修先の判断による研修プログラム自体の中止、研修プログラムの事前から事後までを見据えた予防指導の検討と実施、すでに海外に滞在しているかたがたへの予防指導とケアの問題、研修中のかたから日々届くメールへの対応、海外の感染拡大情報を見ながらの帰国勧奨の判断と帰国手配。隔靴搔痒のもどかしさだけが募る日々。

特に、国際課と国際教育センターで学生派遣に携わるかたがたの獅子奮迅のご活躍がなければ、成り立ち得ない日々の連続でした。研修中の学生のケアのために、急遽、国際教育センター派遣担当のかたに現地入りしていただくこともありました。

こうした背景を頭の片隅に据えながら、本報告に掲載された学生たちそれぞれの文章に、是非とも、じっくりとお目通しいただき、海外短期研修を通じて学生個々がいかに成長を遂げたのかをご確認いただければと存じます。そして、目を通してくださったみなさまにとって、本報告書が大学生活における留学体験の意味と意義を改めて感じ取って頂く切っ掛けとなるのであれば、それは海外短期研修プログラムに携わったもののひとりとして、大変に嬉しく存じます。

この短文を認めている 2020 年 9 月現在、新型コロナウイルス感染症パンデミックは沈静化の兆しすら見えず、短期研修を含めた国際的な人的交流のイベントは凍結されたままにあります。おそらく直近の数年間、パンデミック下での国際的な人的交流の可否と是非を問いつけることになるのだろうと推測していますが、その過程では、これまでに蓄積された海外研修報告書の一文一文が、今後に進むべき道筋を照らす重要な光となるであろうとも確信しています。

国際交流担当の理事・副学長である佐々木泰子先生、前センター長の森山新先生はじめ、海外短期研修の企画運営にご尽力くださった松田デレク先生、鈴木芽以先生、長塚尚子先生、国際本部員の先生方、国際課のみなさま、関係各位には、末筆ながら、この場を借りて改めて深謝申し上げる次第です。

2020 年 9 月

目次

ハル大学（イギリス）	1
トムスク国立教育大学（ロシア）	13
ワルシャワ大学（ポーランド）	17
カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）	47
カリフォルニア大学リバーサイド（アメリカ）	51
南オレゴン大学（アメリカ）	61
モナシュ大学（オーストラリア）	65
バリャドリッド大学（スペイン）	101
ジャン・モネ大学（フランス）	105


UNIVERSITY OF Hull



ハル大学（イギリス）

研修期間：2020年2月10日～3月20日（6週間）

滞在：学生寮

研修内容：英語、イギリス文化学習

ハル大学研修を終えて

理学部 数学科
1820104 小口 真依

授業内容

同じクラスには、中国、タイ、サウジアラビア、クエートなどの生徒がいて私たちを含め 18 人くらいのクラスでした。英語の授業が三つあり、それぞれ週三コマあったので合計で週九コマありました。クラスメイト同士ある話題についてや単語の意味について話し合う機会が多く、お互いに native ではないので、聞き取れなかったり、ゆっくり話しても理解しようとしてくれました。最後に Urbanisation についての 1000 語以上のアカデミックエッセイの提出があり、各授業でそのエッセイに関連した内容を扱って来ていました。最後の週に書いたエッセイの発表がありましたが、コロナの影響で最後の週の授業がなくなってしまったので発表せずに終わりました。

課外活動など

ちょうど Beverley Art Gallery で日本のおもちゃの展示をしようとしていたようで、私たちはそれぞれ日本のおもちゃについてのパワーポイントを作ってプレゼンをして、美術館で使うための映像を撮りました。美術館の方で日本のおもちゃを集めるのが好きな方がいて、いろいろなおもちゃの説明をしてくれました。日本人なのに日本のおもちゃについて全然知らなかったです。

また Howden School というシニアスクールに行って 11、12 歳の子供に盆踊りについての授業をしました。浴衣を着てお祭りや盆踊りについて説明し最後に皆で盆踊りを踊りました。どのような反応になるのか心配していましたが、皆楽しそうにしてくれていたのが良かったです。

授業がない空き時間などには Language Exchange Partner と食事やおしゃべりをして英語の言い回しや細かい発音などの練習を一緒にしてもらいました。

また図書館の Drop in session に行くと予約なしで英語の native の方とおしゃべりをし、英語を教わることが出来るので、特に予定を立てていない時によく行っていました。

さらに Japanese Society の方たちが食事を企画してくれたり、毎週末には近くの町に旅行を企画してくれて、Beverley、Leeds、York などに行きました。一緒に街を見たり食事をしている間に



Japanese Societyの方と英語で交流が出来て英語力を鍛える貴重な機会でした。またバスや電車の乗り方や予約の仕方なども教えてもらいました。最後の二週には自分たちでEdinburgh、Londonに行く予定を立てて旅行に行きました。イギリスの歴史などを学べて楽しかったです。

生活全般

寮は大学から歩いて三分ぐらいのとても近い大学の寮でした。授業の始まる5分、10分前に出ても間に合うのでとても便利でした。また授業と授業の間やお昼休みに家に帰ることもできました。一つの寮には五人分の部屋がありシャワー、トイレは別でキッチンのみ共用でした。私の寮は日本人二人と三人の外国人が住んでいました。近くにTESCOとLidlというとても安いスーパーマーケットがあり私はLidlによく行っていました。野菜などは日本ほど種類はなかったですが、ジャガイモがとてもおいしかったです。またパンやチーズはおいしくて種類が多くあり安かったです。ホールのカマンベールチーズが2ポンドぐらいで買ってとても驚きました。



最後に

私は特にリスニングが苦手な日本で勉強しても一向に上達しなかったのですが、留学に行くことによって英語が少しずつ聞けるようになったと思います。これから英語を勉強していく励みになりました。またハルに住んでいる色々な方と会って話すことによって、自分はになりたいのか、何をなぜ学びたいのかを考えるきっかけになり、自分の専攻である数学とよりしっかりと向き合おうと思うようになりました。

ハル大学研修を終えて

理学部 情報科学科
学籍番号 1820540 森越彩楓

授業内容

授業は3人の先生がそれぞれ週に6時間ずつ担当してくださいました。スピーキング・リスニングの授業、ライティング・リーディングの授業、そしてエッセイの授業があり、たまに課題が出ました。

授業中はもちろん英語オンリー！先生の話をつただ聞くといった感じではなく、クラスメイトとたくさん話す機会がありました。私が一番印象に残っているのが初めてのディスカッション。高校の授業でしたディスカッションは、すでにグループのメンバーがわかっていたり、何を話すかある程度決めることができたけどこちらのディスカッションはぶっつけ本番ですごく緊張しました。

先生方は皆さんとても優しく、学業以外のことでも親身に相談に乗ってくださいました。

課外活動など

授業以外でも現地の日本語を勉強している学生さんと話ができるエクステンジパートナー制度やジャパニーズソサイエティの皆さんとの交流など英語に触れる機会がたくさんありました。皆さん非常に親切で、特にジャパニーズソサイエティの方々にはたくさん助けていただきました。

日本への興味がある方ばかりなので、もしもう一回この留学をやり直せるのなら、私は日本のもの（お菓子や調味料など）を持っていきたいです。また毎週末旅行に行きました。イギリスの街並みはどこも魔法使いが住んでいそうな雰囲気があつて大興奮でした。エディンバラにあるHolyrood 宮殿ではイギリス王室のことを詳しく知ることができ、もっとイギリスが好きになりました。



(写真: Holyrood 宮殿)

そして今年は現地の小学校での盆踊りセッションや美術館での日本のおもちゃ紹介など、ハル大学で勤務されている日本人の先生がいろいろな機会をくださいました。準備が大変でしたが、貴重な経験をすることができました。

生活全般

私がイギリスでびっくりしたことは洗濯機です。お湯を使うので繊細な素材の服は縮んでしまいました。高いお洋服は持っていかないほうがいいです。イギリスの洗剤を使っていましたが特に問題は感じませんでした。

食事に関しては、自炊は全くしませんでした。街にはイタリア料理店やギリシャ料理店などいろいろなレストランがありました。特に中華料理屋さんに何度も行きました。

現金は 4 万円分持って行っていたのですが、割り勘や現金オンリーのお店などがあり足りなくなりました。キャッシング機能のついたクレジットカードは絶対持って行ったほうがいいです。また私はカードが一枚上限を超えてしまったので、カードは二枚以上あったほうが安心かなと思います。イギリスのバスはサインレス決済可能なカードがあると便利でした。

6 週間もちろん楽しいことばかりではなく、大変なこと辛いこともたくさんありました。ですが周りの人からの助けのおかげで乗り越え、無事帰ってくることができました。実りある素敵な留学生活でした。

ハル大学研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科
1730120 三水 美紗子

授業について

英語で英語の授業を受けました。3人の先生に担当していただき、1日に1～3個程度の授業がありました（そのため同じ先生に1週間に何回も会う形になります）。reading, listening & speaking, writing というように、3人の先生の授業ではそれぞれ主なテーマが決まっていて、扱うトピックは互いにリンクしているようでした。ディスカッションやエッセイの中での引用の仕方など、アカデミックな内容を扱いました。クラスは私たちお茶大生（5人でした）の他、中東系（サウジアラビア、クウェート）、タイ、中国などアジア圏からの留学生と合同でした。（ハル大学は中国の大学とパートナーシップを結んでいるようで、中国の学生が非常に多いです。）

授業以外の活動について

放課後などは Language Exchange Partner（現地の日本語を学ぶ学生。私たちが彼らから英語を学び、逆に私たちは彼らに日本語を教えるという関係のパートナーで、現地の日本人の先生に適当に割り振られますが、パートナー以外の人と Language Exchange をすることも可能でした）と英語で会話をしていました。私は英語を話すことを目的としていたのでほとんど毎回図書館で1～2時間ほど話していましたが、人によっては一緒にご飯を食べに行ったりもしていました。Language Exchange といいつつもほぼほぼ英語で話していました。また、City Center（ハル大学からバスで10～15分くらいのところにある市街地。ショッピングモールなどがあります）にも行き、ご飯を食べたり散歩したりしていました。週末はほぼ毎週 Japanese Society（日本語サークル的なもの）のメンバーがハル周辺の観光地に連れて行ってくれました。Beverley, York, Leeds に行きました。また、個人では現地で知り合った日本人学生の方とハル大学技術職員の方と個人でイギリスを再訪していたお茶大の先輩と一緒に Lincoln に行きました。また、最後の週末には、私たちお茶大生5人全員と私たちの Language Exchange Partner2人と Japanese Society の学生1人と現地の日本人留学生1人計9人で、2泊3日のロンドン小旅行に行きました。授業以外の Official な活動としては、Beverley Art Gallery で日本の伝統的なおもちゃについてスピーチをしたこと（渡航前に知らされ、リハーサルのお機会も設けられました。今後も毎年続くかどうかはわかりません。）と、地元の学校の児童に盆踊りとソーラン節を教えに行ったことなどがありました。

生活全般

今年から宿泊先が変わり、設備の良いきれいな学生寮になりました。ハル大学から歩いて5分の場所にあるので、去年までとは異なり通学のバス代もかからず、何より近くて非常に便利でした。

食事は自炊なので近くのスーパーで食材を買い出ししていました。TescoやLidleというスーパーが現地ではメジャーで、私はこのうち比較的安いLidleの方で主に買い物をしていました。時々Newland Avenue沿いにあるレストランで外食したりもしました。中華のレストランがあるのでお米が食べなくなったらそこに行くのも良いかもしれません。

今年にはコロナウイルスが流行したこともあり、その発源地がアジア圏であったためにごくまれにですが差別的な発言を通行人や子どもから投げかけられたりもしました。そんなときには一緒にいるLanguage Exchange Partnerの学生などがかばってくれ、本当にうれしく心強かったです。また、そのようなことを言われてもそもそも耳が慣れていず聞き取れないために全く気がつかないということも多々ありました（笑）。

ハル大学研修を終えて

理学部 生物学科
1920404 池島日向子

1. 授業内容

授業は1コマ105分、週9コマあり、listening & speaking, reading & writing, essay に関してそれぞれ3コマずつありました。

Listening, speaking の授業では、3週間ごとにテーマが決められており、最後にグループディスカッションを行いました。テーマは、「育児は母親がすべきか、父親の役割は何か」と「ストレスの対処法、ストレス解消のための施設の予算案について」の2つでした。そのグループディスカッションに向けて、トピックに関する理解を深めるために、リスニングやディスカッションを授業で行いました。リスニングは、音源を聞いて問題に答え、回答を近くの席の子と話し合うスタイルでした。普段の授業のディスカッションは、雑談のような感じで気軽にやっていました。クラスに様々な国籍の子(全員、英語は母国語ではありません)がいたため、話していて異文化について知ることができました。最後のグループディスカッションは、4,5人のグループで5分間クラスメイトの前で話し合い、全体の講評を聞いたのち、個人の点数、評価がそれぞれに配られるというスタイルでした。負荷が大きかった分、ディスカッションの際の技術が向上したと感じています。

Reading, writing の授業では、短い文章を週にいくつか書きました。また、文章を書くにあたって必要な知識を、英文を読むことで補いました。毎回、様々なテーマがありましたが、特に、文献を引用する方法について重点的に学びました。書いた英文は添削してもらえるので、直して再提出していました。何度も繰り返すことで、自分の弱点が見えてきて、より良い文を書けるようになりました。

Essay の授業では、6週間かけて1000字の文章を書きました。大きなテーマは「都市化について」で、そこから個人で発展させて文章を書きました。1000字書くにあたり、たくさんの文献を読む必要があるため、授業中に専門的で難しい単語についての解説があり、それを踏まえて個人で文献調査を進めるスタイルでした。

課題が出されたりするので少し大変でしたが、3つの授業につながりがあり、全部の授業を通して英語の力が総合的に伸びたと感じています。

2. 課外活動など

授業を受けていて教育について興味が出できたと先生に話したら、別の先生がやっているゼミを紹介してくださったので、個人的にそのゼミにも参加しました。そこで

は、英語教育について、近くの学生と話し合い、考えを深めました。そのゼミの参加者の方がクラスメイトよりも英語のレベルが高く、トピックにも興味があったため、とても刺激的で楽しかったです。

また、週末には友達と色々な場所に出かけました。主に、Japanese Society というサークルのメンバーと行動しました。具体的には、リーズ、ヨーク、エディンバラ、ロンドンなどに行きました。写真は、リーズとエディンバラです。



3. 生活全般について

寮の近くにスーパーや飲食店があるため、食事には困りませんでした。駅まではバスで移動したのですが、バスはコンタクトレスのカードか現金しか使えず、毎回現金で払うのは面倒だったので、コンタクトレスカードを持っていけばよかったと思いました。洗濯機や乾燥機は寮に、暖房、シャワーはそれぞれの部屋についていたので、快適に過ごすことができました。

ハル大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1910213 角野 沙也花

【授業内容に関して】

授業は週9コマあり、1時間45分の授業を1日1コマ~3コマ受けました。クラスには、中国人、サウジアラビア人、タイ人、クウェート人がおり、違う国出身の人と隣の席に座ることを先生から求められたため、授業時間だけでなく、休み時間も自然と様々な国出身の人と話すようになりました。科目としては、Listening/Speakingの授業、Reading/Writingの授業、Writingに特化した授業の3つがありました。Listening/Speakingの授業で興味深かった点は、様々な国から来た生徒と英語で色々な社会問題についてディスカッションを行ったことです。今回の研修期間での主なディスカッションのテーマは自国と他国の家族関係の違いとビジネスを始める上でのマインドセットに関するものでした。ディスカッション中に出身国の違いに起因する考え方の違いが見受けられることがあり、その違いの根底にある文化や伝統を知るとはとても興味深いと感じました。Reading/Writingの授業は、他の国出身の生徒と一緒に課題に取り組む機会が多く与えられました。文献の引用の仕方やIntroductionやConclusionの書き方などを学びました。Writingに特化した授業は、最終的には1000 wordsのエッセイを提出しなければならず、様々な文献を読みながら専門的な語彙を習得するとともに、自分のエッセイに対するアドバイスを先生からももらえるといった内容でした。今回のエッセイのテーマはUrbanisationで、授業中に自分の語彙の不足を実感することが多かったものの、どの先生方も失敗することを恐れず挑戦しろとおっしゃっていたので、わからないことがあったときに遠慮せずに質問することができました。授業全体として、英語を学ぶだけではなく、英語で学ぶことも多かったため、非常におもしろく、満足度の高い内容でした。

【課外活動に関して】

主にexchange partnerとどこかに行くことや、ご飯を一緒に食べて過ごすことが多かったです。私にはイギリス人2人、ギリシャ人1人、ウズベキスタン人1人という4人のexchange partnerが無作為に割り当てられ、後に中国人の学生が1人加わりました。このexchange partnerは日本語の授業を取っている学生から選ばれるため、どの学生も多かれ少なかれ日本に関心を持っており、会話がよく弾みました。言語だけでなく英語を通じて文化や考え方等もexchangeすることができたため、英語を楽しみつつ運用することができ、充実した時間を過ごすことができました。また、同じ授業を取っていた中国人の学生数人と一緒に中国料理店に行ったこともありました。仲良くなったexchange partnerと一緒にイ

ギリスのパンケーキ・デイをお祝いしたことや、サンデー・ディナー、中国料理、ギリシャ料理をご馳走してもらったことは、この短期研修で得たかけがえのない思い出です。

【生活全般について】

基本的にスーパーに行けば日用品は何でも揃いますし、もちろん日本よりも不便なところもありますが、それも文化の一つとして捉えられれば乗り越えられます。しかしイギリスの治安はそこまで良くないため、路上でホームレスの人に声をかけられることもありました。幸い、私たちの誰かが何かを盗まれるといった事態は発生しませんでした。盗難防止のために身体に密着型のバックを一つ以上持つていくことをおすすめします。

【休日の過ごし方について】

毎週末 Japanese Society の方々に色々な場所に連れて行ってもらいました。訪れた場所としては、ベバリー、ヨーク、リーズ、エディンバラ、ロンドンです。どの場所もそれぞれ違った魅力があり、ヨーロッパの街並みに憧れを抱いていた私にとって何もかもが新鮮でした。もしこの研修に参加するのならば、イギリスに行く機会は人生の中でそこまで多くないと思うので、後悔のないよう、興味のある場所にはどこでも行ってみるべきだと思います。

【その他の感想・反省点】

・SIMカードを現地のスーパーマーケットで買ったものの、実際にそれを機能させるためには追加料金を払わなければならなかったため、SIMカードを機能させないままイギリスで6週間過ごしました。寮と大学ではインターネットがつながるため、基本的に問題はありませんでした。いざというときのために渡航する前、もしくは現地に着いてすぐ購入すべきだったと反省しています。

・変圧器と変換機の仕組みをよく理解していなかったため、日本から持ってきたドライヤーが壊れました。新しいものを現地で買うまで他のお茶大生に迷惑をかけてしまったので、今度留学するときは変圧器も忘れずに持っていこうと思います。

・現地の小学校訪問で盆踊りを小学生に紹介したのですが、時間が大幅に余ってしまったため、即興でお茶大の先輩方にソーラン節を踊ってもらうことになりました。先輩方の柔軟な対応のおかげでなんとかやりきることができましたが、来年度以降は2曲程度、教える曲を予め準備しておくことをおすすめします。

・睡眠不足が続くと体調を崩しやすくなり、授業への集中力も落ちる（特にリスニング能力が落ちる）ので、研修期間中楽しいことが多いですが、できる限り意識して取るが大切だと思います。

【終わりに】

私が今回の短期研修で学んだことは主に以下の三つです。

一つ目は、出身国や文化・伝統が違ったとしても、根底にある考え方は理解可能であるということ。

二つ目は、日本人としての意識が改めて養われ、日本人としての自身の在り方や自国の在り方に目を向けるようになり、より客観的・批判的に自身を捉えるようになったこと。

三つ目は、何事も与えられた機会を生かせるかどうか、研修を充実させることができるかどうかは自分自身にかかっているということ。その意識を常に持つておくことが大切だということ。

今回、この研修に参加したことで様々なものに対する自分の考え方が大きく変わりました。自分の将来を考えていく上で、とても意義ある研修になりました。研修費用を負担してくれた親、様々な助言をしてくださった大学の職員の方々、一緒に研修を充実させてくれたお茶大生や現地の友達に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。



← 私のお気に入り
の
Carrot cake



← British
Museum



トムスク国立教育大学（ロシア）

研修期間：2020年2月17日～3月6日（3週間）

滞在：大学寮

研修内容：ロシア語研修・ロシア文化学習

トムスク国立教育大学研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1730430 亀田睦季

授業

ロシア語の授業は、平日に1日3時間程度行われました。簡単な挨拶から始まり、基礎的な文法を学びました。授業で覚えたフレーズを、買い物するときや現地のロシア人と交流するときを使う、というように、実践的にロシア語を身につけていくことができました。

また、ロシア文化に関する授業も1日1時間程度行われました。講義だけでなく、ボルシチやブリニー（ロシアのクレープ）を作ったり、伝統的な人形を作ったり、スプーンの絵付けをしたりしました。みんなでシベリアンハスキーの犬ぞりに行ったりもしました。

研修の最後には、日本人学生による劇と自由テーマのプレゼンテーションがありました。ロシア人学生や、他の国からの留学生が聞きに来てくれました。



授業風景

自由時間

自由時間がたくさんあったので、博物館や美術館、ショッピングセンター、市場などいろいろ回りました。買い物好きなので、あちこち店を訪ねて、民芸品や化粧品などをたくさん買いました。

現地の日本人の先生の勧めで、クラシックコンサートに行ったり、バーニャサウナに行ったりもしました。クラシックコンサートに限らず、演劇やオペラなどは、かなり安い値段で観ることができました。トムスクでは、身近に芸術に触れる機会が多いのではない



レナ川、プーシキン像

かと予想します。せっかくなので、もっといろいろ観に行けばよかったと思います。バーニャサウナは、日本人の希望者で貸切予約をして入りました。寮にはシャワーしかないので、湯船に入るのと同じ感覚のサウナはとても気持ちよかったです。

また、マースレニツァという春のお祭りにも出向きました。普段トムスクにはそんなに人が多く歩いているわけではないですが、お祭りの日は中央公園に人がごった返っていて

驚きました。特に子供がたくさん来ていました。ブリニーの屋台が出たり、民芸品の出店があったり、ステージでは青少年がダンスを踊ったりしていました。いい天気でもとても楽しかったです。

生活について

かなり寒いのを覚悟して行きましたが、今年は暖冬ということもあり、恐ろしく寒いわけではなかったのは幸いでした。外に出るときにきちんと防寒すれば、快適に過ごすことができました。

食べ物は、何を食べてもかなり美味しかったです。味噌汁など日本食をいろいろ持ってきましたが、日本食が恋しくなることはほとんどありませんでした。基本的には外食したり、学食を食べたり、スーパーや市場で材料を買って自炊したりしました。あとは、みんなで作った大量のブリニーを頑張って消費しました（笑）



ブリニー

寮は、2人部屋・1人部屋と洗面・トイレ・シャワーで1つのまとまりになっていて、キッチンとランドリーは共用でした。部屋は思ったより広く、快適に過ごすことができました。同じプログラムに参加する日本人と、キッチンでよく集まって一緒に食事したり、遅くまで談笑したりしました。ドアの鍵が壊れていたり、ドアが取れたり（!）ということもありましたが、（トムスクの空港ではトイレの鍵が壊れて閉じ込められました...）それ以外はあまり問題なく過ごせました。

交流について

学生時代に日本語を学習していたOG、OBのロシア人の方や、国際交流に興味を持つロシア人学生と知り合うことができました。覚えてたのロシア語や英語を交えて、積極的にコミュニケーションをとるようにしました。寮の同じフロアの留学生とお話したり、留学生による国対抗のスポーツ大会で、色々な国からの留学生と触れ合えたのも楽しかったです。

ただ、スケジュールのはじめの方で、もっとたくさんの方々と触れ合う機会があると良いと思いました。最終日のパーティーで、多くの方と交流できたのですが、もっと早く知り合いたかったなあ、と強く感じました。研修全体として、日本人でまとまって行動することが多く、現地の人たちとの交流の機会が少なかったのが少し残念でした。

さいごに

私は1年間、お茶大でロシア語を勉強しましたが、最初に飛行機に乗ったときはロシア語は全く聞き取れず、現地で3週間まともに生活できるかとても不安でした。しかし、授業を

受けて少しずつわかる単語が増えて、街に出て実際に言葉を使っていると、もう留学の最後のほうには、スムーズに買い物できるようになり、ロシア語しか喋らない寮の管理人さんの言っていることがなんとなくわかるようになりました。3週間の成長を強く感じました。

また、ロシア人は見ただけでは冷たい感じがしますが、とても親切だと感じました。お祭りで私がロシア語を全く聞き取れなくて困っていると、後ろに並んでいたおじさんがジェスチャーを交えて一生懸命教えてくれました。他にもいろいろな場面で助けてもらいました。交流会や、イベントの後には必ず紅茶と、お菓子やパンを並べる、というのも、ロシアのおもてなしの気持ちの表れではないかと思います。様々な場面で、ロシア人のあたたかさを感じました。

トムスクは日本語で検索をかけてもほとんど情報が出てこないのに、研修に行く前は未知の世界でしたが、行ってみるととても素敵な街でした。ロシアという国・ロシア文化に対しても、以前よりもっと興味が湧くようになりました。大変有意義な研修でした。
С п а с и б о !



ワルシャワ大学（ポーランド）

研修期間：2020年2月18日～3月13日（4週間）

滞在：派遣校提携ホテル

研修内容：ポーランド語・ポーランド文化学習

ワルシャワ大学での研修を終えて

文教育学部言語文化学科

中国語圏言語文化コース

学籍番号 1710232

河北華実

1) 授業内容

ワルシャワ大学での授業のメインはポーランド語です。今回の研修では週3回以上は朝からポーランド語をみっちり勉強しました。今回、私たちにご指導してくださったのは、普段ワルシャワ大学でポーランド人の学生に対して日本語を教えているというモニカ先生です。約四週間という短い時間の中でしたが、ある程度の文法と挨拶は日常生活で使えるようになりました。やはり現地の言葉を使って現地の人と交流することは留学に置いて最も大切なことだと思います。

ポーランド語授業以外には、ワルシャワ大学日本語学科の学生さん達と交流する時間として、ポーランド文化を学ぶ授業がありました。学生さんが各自担当し、私たちお茶大生に文化を紹介してくれました。パワーポイントを使用した発表から、一緒にポーランド語の歌を歌ったり、ポーランドの伝統的なダンスを習ったりと非常に充実した内容でした。

2) 課外活動

課外活動では、私はポーランドの美味しい食べ物を全部食べるという目標を掲げました。今年の2月11日は、ポーランドでは『脂の木曜日』という祝祭日でした。この日、ポーランドでは“ポンチキ”という伝統的なお菓子を狂うほど食べるそうで、ポーランド文化の授業を通して仲良くなった学生さんと一緒に有名なポンチキ店に買いにいき、四週間の間に、ピエロギやヴェデルのチョコなど、日本語学科の学生さんに教えてもらいながら美味しい物をたくさん食べました。食を通じて、私はポーランドが大好きになりました。そこで、私がポーランドのことを好きになったように、日本の食のことを知りもっと日本が好きになってもらいたいと考え、ポーランド文化の授業時間をおかりして交流会を企画しました。交流会の内容は日本での大学生活と、日本の美味しいラーメンを紹介し、もっと日本に興味を持ってもらおうというものです。会の最後には、日本人とポーランド人が実際にカップラーメンを作り、交流を図りました。

3) 生活全般

生活面では、物価も安く必要な物は手に入るので、とても生活しやすい環境でした。町の至る所に、コンビニやカフェがあるので、授業の合間にゆっくり休憩することもできます。しかしコロナウイルスの影響により、帰国に近づくにつれて生活は厳しいものとなっていきました。街中ではアジア人に対する目が厳しくなっている、不愉快に感じることもありました。状況の悪化に伴い、次第に町に出歩く人も少なくなっていきました。



ポンチキは真ん中をくりぬいていないドーナツで、中にはパラジャムが入っている。

ワルシャワ短期研修を終えて

理学部 物理学科

1820215 笹貫百花

1. はじめに

私がこの短期研修に参加した目的は、本場でクラシック音楽を体験すること、海外の学生から刺激を受けること、マイノリティーとなることを体験することであった。そこで、この三つのテーマと現地での生活について報告書を作成しようと思う。

2. 生活全般について

現地の方は親切な方が多く、治安も良かったため概ね安全に過ごすことができた。ただ、乗っていたバスがタイヤの故障により突然止まり、野原に降ろされたことがあり、これは少し不安になった。周囲の人が原因について話すものの言葉がわからず、雰囲気を読んだり言葉以外でコミュニケーションをとる大切さを学ぶことができた。また、スーパーや酒類はとても物価が安く、外食が増えてもフルーツやトマトから安く美味しく栄養を取ることができた。感染症で差別されることはあったけど実害があるものではなく、ヨーロッパでは比較的生活しやすい国だと思われた。

3. 音楽について

留学先のポーランドでは、ポーランドゆかりの作曲家であるショパンの音楽にたっぷり浸り、また週末の国外旅行では華やかなコンサートも体験することができた。ポーランドではショパンが好んだと言われている小さなサロンコンサートが毎晩様々な場所で開かれており、予定が空いている日はなるべく訪れた。数多くのコンサートを訪れることで、ピアニストごとの解釈や特徴の違いも感じたが、共通していることもいくつか見つけられた。この曲は何を表している何を伝えたいのかがはっきりと見えること（革命など）、似ている箇所での繰り返しでのペダルや音質による飽きさせない変化の工夫、ストーリー性があること、民謡やダンスを元にして曲では焦りが一切ないこと、死や苦しみが関係する曲でのリアリティがとても強いことなどである。ウィーンでの国立歌劇場でオペラ鑑賞や、教会でのウィーン少年合唱団の演奏を鑑賞では、音楽が純粋な目的だけでなく社交や信仰、ブランド力のためにも用いられていたことが感じられた。特にミサでは人の気持ちの誘導や説得のためにも音楽が使われていることを知ったり、音のタイミングや、音が高くへ上っていく感覚を味わえた。

コンサート以外でも、ショパン像で有名な公園を何度も散歩したり、心臓が眠っている教会のミサに出席したり、博物館や両親のお墓参り、行きつけのレストランなど多くの

場所を訪れ、その風を味わうことができたので、これからの自分の演奏や感性に活かしていきたい。

4. 現地の学生との交流（授業以外）

授業ではどうしても受動的になってしまうため、授業外では積極的に話しかけることに努めた。その結果、日本学科の学生や卒業生とご飯やスイーツ、お酒を食べたり飲んだりしに行くことができ、友達も作ることもできた。彼らと会話する中で特に感じたことは、勉強量の差である。特に専門科目にかける自己学習の時間が、日本人は圧倒的に足りていないような気がした。自分で選んでマスターしようとしているならば、もう少し時間とエネルギーを勉強にかけなければ、と刺激を受けた。また、政治への関心の高さやLGBTに対する考えの柔軟さにも刺激を受けた。

彼らの中でも私が一番仲良くなったのは、三年生のドミニカちゃんである。直感で自分から話しかけたのだが、自分では見つけられないような小さいけどとっても美味しいピエログのお店に連れて行ってくれたり、ラーメンを食べに行ったりミルクバーやお買い物に行ったりした。ホテルに帰った後も連絡をとり、彼女と「おやすみ」、「また明日ね」、と言い合えることで、心細い日も勇気付けられた。また、彼女はベジタリアンであったり、友達とルームシェアをしていたり、キリスト教徒であったりと、日本では珍しい生活スタイルをしていたため、それについて話を聞くことはとても面白かった。いつか彼女が日本にきたら、今度は私が恩返しをしたい。

5. マイノリティについて

今回の研修では日本人の参加者も多く、マイノリティを感じる機会は少なかったが、感染症の危機が強まってきたときや地元の音楽大学のコンサートに行ったときに自分が外国人であることを強く感じた。ただ歩くだけでコロナ〜と呼ばれたり笑われたりすることもあったけど、アジア人である自分に自信を持つこと、好きになること、焦らないこと、笑顔を忘れないことで乗り切れるように思った。また、外国人は現地人から向けられる笑顔のパワーの大きさも知ったので、これからたくさんの笑顔に向けていきたい。



ワルシャワ大学研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1930402 石崎 夏菜

1. 授業について

授業は日本語でのポーランド語学習、ワルシャワ大学日本学科の学生によるプレゼンテーション及び質疑応答形式のポーランド文化学習、日本語でのポーランド歴史の学習、英語でのポーランドの文化や映画に関する学習がありました。クラスはポーランド文化の授業はワルシャワ大学の学部3年生や院生と一緒にでしたが、その授業以外はお茶大生のみでした。授業時間は90分で、午前中に授業が終わる日もあれば18時過ぎまで授業がある日もありました。4種類の授業がありましたが、ここではコマ数が多かったポーランド語とポーランド文化の授業について少し紹介したいと思います。ポーランド語の授業は、先生が文法事項や単語の説明をしたあとに、学生みんなでプリントの問題を解いたりペアワークをしたりするという形で行われました。ポーランド語は私にとって未知の言語でしたし、活用が多くて難しかったです。先生はとても丁寧に日本語で教えて下さったので安心して学ぶことができました。また、質問もしやすい雰囲気だったのでその場で疑問を解消することができました。ポーランド文化の授業では、ワルシャワ大学日本学科の学生の皆さんがさまざまな発表を用意して下さい、ポーランド文化に詳しくなれました。また、日本学科の学生はとても日本語が上手で驚くと同時に、私は英語を何年も勉強しているのに関わらず全然話すことができないため自分の英語力の低さを反省しました。どの授業も興味深く、大変勉強になったのですが、コロナウイルスの影響で大学が休校になってしまい、二日分の授業がなくなってしまったことがとても残念でした。

2. 平和学習について

カリキュラムの一環としてワルシャワ蜂起博物館の見学とアウシュヴィッツ強制収容所の見学がありました。博物館の見学はワルシャワ大学の方が案内して下さい、館内は日本語音声ガイドを聞きながら回りました。第二次世界大戦中ドイツ占領下にあったワルシャワの状況やワルシャワ市民の境遇を体感することができました。アウシュヴィッツは、以前から一度はここに行ってみたいと思っており、今回の研修に申し込んだので見学することができてとても良かったです。アウシュヴィッツでは日本人ガイドの中谷さんが案内して下さいました。ここに来て、中谷さんのお話を聞いて、初めて気づいたことがたくさんありました。ナチスが行ったことは遠い過去の話ではなく、現在の日本でも同じような考え方による事件が起きていること、民主主義のもとで大量虐殺が行われたこと、小さな変化の積み重ねから大量虐殺に至ったことなどを学び、平和の尊さを改めて痛感しました。この見学を通して、しばしば大衆迎合してしまう自分の生活を見直すきっかけとなりましたし、大学生活

の中でこれから考えていきたいテーマも見つけることができました。

3. 現地学生との交流について

授業後に現地学生が声をかけてくれて、連絡先を交換したり食事に出かけたりして仲良くなることができました。また、お茶大生が現地学生とアポを取ってくれたものに私も参加して、現地学生と一緒に美術館や展覧会に行ったこともありました。これほど多くの海外の学生と交流し、現在でも連絡を取り合う方ができたことはとても良い経験となりました。

4. 生活について

まず、交通手段については到着日にポーランド語担当の先生が1カ月定期券を手配して下さり、バス・トラム・メトロが乗り放題だったのでとても便利でした。次に、宿泊施設については大学提携のホテルで、トイレの鍵やドアが閉まらなかったりタオルが4日に1回程度しか替えてもらえなかったりとサービスはあまり良くありませんでした。しかし、部屋が寒くなかったことは良かったです。最後に、食事については、朝食はホテル内のレストランを利用したりスーパーで買ったトーストとジャムを食べたりしていました。昼食は外食で、夕食は外食や日本から持って行ったお味噌汁などを作って食べていました。

5. おわりに

私は海外に行くのが初めてで最初は緊張していました。しかし、行ってみたら何もかもが新鮮でとても楽しかったですし、学ぶこともたくさんありました。そして、今回の研修を実施するにあたり、両親やお茶の水女子大学の先生方、ワルシャワ大学の先生方など非常に多くの方々からのご協力を頂きました。たいへん感謝しております。また、この研修と一緒に参加し、4週間協力しながら生活した皆さんにはお世話になりました。ありがとうございました。そして、末筆ながら私の拙い報告書に目を通して下さった皆様にも心より御礼申し上げます。



ワルシャワの旧市街



ピエロギ

ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
学籍番号 1910256 中井 望賀

1. はじめに

筆者は、2020年2月17日～2020年3月15日までの期間、ワルシャワ大学研修プログラムに参加した。本報告書では、(1) 授業内容 (2) 課外活動 (3) 生活全般について報告する。

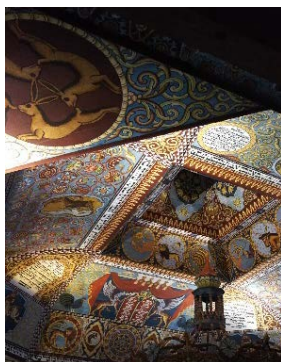
2. 研修報告

(1) 授業内容について

授業は主に「ポーランド語」「ポーランド文化」「ポーランドの歴史」から構成されていた。「ポーランド語」は、ポーランド語を発音から学ぶ初学者向けの授業であった。ポーランド語の発音、基本的な挨拶、基本的な平叙文の作り方、格変化を学んだ。「ポーランド文化」の授業では、ワルシャワ大学日本学科の学生と交流する時間と、講師から英語でポーランドの芸術の分野の歴史について学ぶ時間があった。ワルシャワ大学の学生との交流では、学生からのポーランドの文化についてのプレゼンテーションと、ポーランドと日本の文化の差異についてのスピーチがあった。交流を通して、ポーランドの食文化や伝統、伝奇から現代の若者のジェンダーに関する問題意識まで幅広く知ることができた。また、最終週の授業では、日本人学生からポーランド人学生に対して日本の大学生活について発表し交流会を行った。

「ポーランドの歴史」の授業では、ポーランド史の概略について講義を受けた。主に第二次世界大戦中・戦後のポーランドをめぐる歴史について学んだ。

(2) 課外活動について



写真：シナゴグの一部を移築した展示の天井部分

課外活動として、ワルシャワ市内の二箇所の博物館を訪れた。一つ目は、POLIN Muzeum Historii Żydów Polskich (ポーランド ユダヤ人の歴史博物館) である。この博物館では、ポーランドにおけるユダヤ民族の歴史を展示している。中でも目を引いたのは、シナゴグの一部を移築した展示物であった。

二つ目は、Muzeum Powstania Warszawskiego (ワルシャワ蜂起博物館) という、第二次世界大戦中のワルシャワ蜂起についての展示のある博物館である。日本語の音声ガイドを聴くことができた。現在のワルシャワの街に

至るまでの歴史を知ることで、ワルシャワの街に対する意識が変化した。市街地に像が多いのは、戦いの歴史や民族にとって偉大なポーランドの人物を後世に残すためではないかと考えるようになった。

また、フィールドトリップとしてクラクフを訪れた。クラクフ旧市街やアウシュヴィッツ博物館の見学を行った。筆者にとって最も印象的だったのは、アウシュヴィッツ強制収容所跡の建物の一部が自然のままに展示されていたことである。それはユダヤ教の「死者のものには手を触れず、自然のままにしておく」という考えに



基づいてのことである。かつて収容棟であった建物が風化し、建物の内部がむき出しで部屋の構造も一目では判別できない様に、筆者は戦争からどれだけの年月が経過したかを感じずにはいられなかった。戦争から年月は経過したが依然として世界には差別や格差といった問題があり、それらと向き合うことが私たちの果たすべき役割であると痛切に感じた。

写真：アウシュヴィッツ強制収容所跡

(3) 生活全般について

研修中は基本的に同じ研修グループの日本人学生と共に行動していたが、現地学生と食事に行くこともあった。前述の「ポーランド文化」の授業で交流したワルシャワ大学の学生と、ポーランド料理を食べたり彼らの専攻や日本とポーランドの文化の違いについて話したりした。また、週末にチェコとドイツへ訪れた。プラハの共産主義博物館、ベルリンのホロコースト記念碑、ベルリン・ユダヤ博物館、テロのトポグラフィ等を探り、それぞれの国の視点から第二次世界大戦や戦後の処理について考える材料とした。

3. 最後に

筆者は今回の研修を通して、自分の専攻を学ぶ意義についてこれまでより深く考えるようになった。筆者は日本文学と日本の社会の関りについて学びたいと考えていた。文学が社会と相互に影響し合う現象として、戦争文学や震災文学について学びたいと考えていた。研修でアウシュヴィッツ博物館を訪問した際、ふと入試の面接で問われた「なぜジャーナリズムではなく文学を勉強するのか」という質問を思い出した。社会との関りの中で、「伝える」ということに対して文学にしか果たしえない意義があるのだと信じて文学について学びたいと考えた。今回の研修において最も大きい成果は、専攻分野に対する姿勢の変化であると言える。専攻分野の他の学問分野との差異化は、今後の学びにおける課題である。

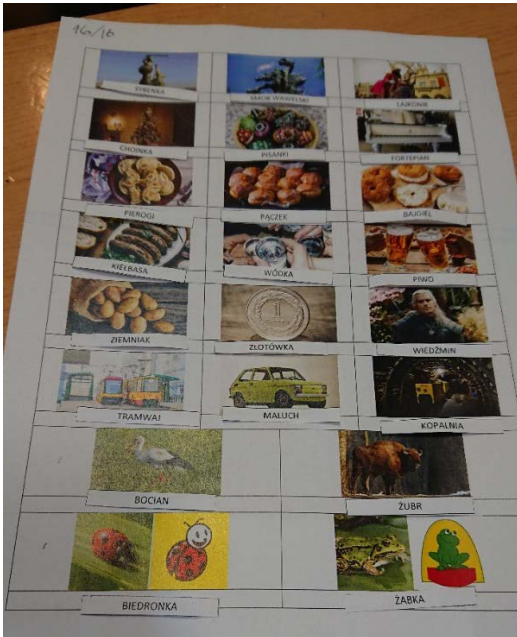
ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部言語文化学科

1910252 筒井ひかり

○授業内容

授業は基本的に「ポーランド語」と「ポーランド文化」の授業で構成されており、「ポーランド文化」の授業については、ワルシャワ大学の学生と交流をしながら日本語で学ぶ授業とワルシャワ大学の先生が英語で講義をしてくださる授業がありました。ポーランド語の授業は日本語で行われ、ポーランド語はドイツ語に似ているということで、ドイツ語と少しからめながら、また、文のニュアンスを伝えるにあたって英語を使うときもありました。ワルシャワ大学の学生と受けた授業は、ワルシャワ大学の学生がスライドを使ってポーランドの民謡やことわざ、伝統的な食事、記念日、結婚などについて日本語で発表してくださいました。また、その中ではチームでクイズに答えるゲームもあり、楽しみながらポーランドについて知ることができました。英語で行われる授業については、ポーランドの文化全体の講義とポーランドの映画に焦点を当てた授業がありました。



上の写真はワルシャワ大学の学生が作ってくださったゲームです。

○課外活動

私の今回の留学の目的は、歴史の実際の場所に行つて雰囲気を感じることであったので、ワルシャワの博物館以外にプラハとベルリンに行き、様々な博物館や記念碑などを見に行きま

した。やはり本を読むだけではなく、実際の地に行って自分の目で見に行かなければならぬいと感じました。また、空いている時間は散歩をしていたので、日本とは違う、ポーランドの人々の生活の様子を知ることができました。



上の写真はベルリン・ユダヤ博物館の写真です。

○生活全般

寮にはキッチンがあるとのことでしたが、ケトルと冷蔵庫しかなく、ある意味給湯室でした。電子レンジがあると思っていたので、サトウのご飯を持って行ったのですが、使う機会がなく、泣く泣く持ち帰り、ただただ重いだけでした。ちなみにレトルトカレーも持ってきており、カレーライスにする予定でした。また、寮には掃除をしてくれる方がおり、最初は頭を下げるだけでしたが、ポーランド語の授業で習ったあいさつの仕方とお礼の言葉を使ってコミュニケーションをとることができるようになりました。

ワルシャワ大学研修を終えて

生活科学部人間生活学科

1930409 柏野真里奈

研修前、私はあまりポーランドについての前知識がありませんでした。しかし、前情報がほとんどないからこそ、今回自分の目で見て体で感じられたことの数々がどれも新鮮で印象深いものとなりました。地理的にも文化的にも、日本とポーランドとは少し距離があるように感じていましたが、1ヶ月間の生活を経てポーランドの魅力をたくさん知ることができました。以下、3点に分けて記述していきます。

1. 学生との交流

研修では、ワルシャワ大学日本語学科の学生たちと受ける授業が多くありました。学生たちと会う前はどのようにコミュニケーションを取ればよいのか不安に思っていたのですが、学生のみなさんはとても流ちょうに日本語を話していて不安はすぐに吹き飛びました。日本とはあまり馴染みがないと思っていたポーランドで、日本という国に興味をもち学んでくれている学生がたくさんいるという現状を初めて知り、嬉しく思いました。

授業では学生のみなさんがポーランドの文化を日本語でプレゼンしてくれました。とても親切に優しく話すばかりで、様々な学生と交流することができました。普段日本人と直接話をする機会が少ないこともあり、学生のみなさんは授業外にも積極的に交流してくれました。放課後や休日には、おいしいポーランド料理のお店やワルシャワ市内の名所を案内してくれました。みなさんが日本の何に惹かれどのように学んでいるのかを聞くことができ、非常に興味深く楽しい思い出になりました。

2. 現地の生活

ワルシャワはとても洗練されていました。治安がよく、日々生活する中での不安は感じずに過ごすことができました。下の写真は全く異なった風景ですが、どちらもワルシャワ市内のもので、都会的な雰囲気と歴史的な町並みどちらも楽しめる、素敵な街でした。

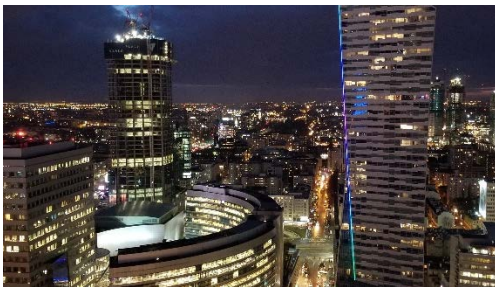


写真1 ワルシャワ中央駅周辺

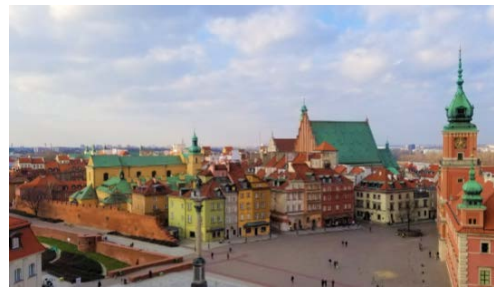


写真2 旧市街の建物

食に関して、外食中心の生活でしたが、物価が安いのでそこまで大きな出費にはなりません。お店にもよりますが、毎回 500～1000 円で十分な量が食べれていました。



写真3 ポーランド料理店「Zacpick」の焼きピエロギ

写真の食べ物は「ピエロギ」という伝統料理です。焼いたものや蒸したものなど、お店によって調理方法も具も異なっていました。一見ギョーザのように見えますが、皮がギョーザよりも厚くもちもちしています。具はひき肉やマッシュルーム、キャベツなどのおかず系からブルーベリーのようなおやつ系まで様々です。現地の学生たちはじゃがいもとチーズを混ぜたものが1番好きだと話してくれました。

3. 平和学習

ポーランドは世界第二次大戦の主な戦場となった地であり、当時の状況を伝える博物館がいくつもありました。その中でも、アウシュヴィッツ強制収容所を訪れた際には、生々しいほどにありありと展示された数々の遺品や写真に、時折思わず目を覆いたくなるほどの衝撃を受けました。当時行われたことの無残さ残酷さ悲惨さが伝わり、言葉では表しきれない感情を抱きました。

今回、私たちは強制収容所見学の際に、中谷さんという公式の日本人ガイドの方に案内していただきました。中谷さんのお言葉の中で特に強く印象に残っているのは、「今の時期に見学に来られたことはラッキー」「こういう状況になって初めて教育がいきる」という言葉です。今回、感染症が流行しはじめた時期と研修が重なり、見学の数日前からちょうど現地人からのアジア人への冷たい視線を感じ始めていました。初めは何ともなかった視線がだんだん冷たくなっていく過程を経験したものとして、ただ事実を教えてもらうこと以上に当時のユダヤ人たちの状況を、身をもって考えることができたように感じます。

これまで、“アウシュヴィッツ強制収容所”という名前は耳にしたことはありますが、その実情や時代背景を十分に考えられてはいませんでした。実際に説明を聞きながら目の前の展示と向き合い、当時の生活を想像するという経験は、他のどんな学習方法にも代え難いものです。このような世界状況の中で学ぶことが出来たことのありがたさと必然性を感じ、今回得た思いを心に持ち続けたいと思います。

ワルシャワ大学研修を終えて

生活科学部 人間生活学科
学籍番号 1930411 河上美紀

1. 学習に関して

ワルシャワ大学で私たちは主に文化や歴史に関する授業を受け、また日本学科の生徒の皆さんとも多くの時間を使って交流することが出来ました。歴史や文化に関して言えば、ポーランドという国が持つ非常に複雑な歴史的背景や、根強く残る第二次世界大戦の記憶、そしてワルシャワ蜂起という出来事にみられるような蜂起という一つの文化というように、自身がこれまで世界史の教科書の一部でしか見たことが無かったような事柄であったとしても、実際に現地で話を聞くことによって人々の中に根付く生の歴史を体感することが出来、非常に興味深い体験をすることが出来ました。また、私は今回の研修に参加するにあたって「ポーランドから見た日本」というテーマに興味があったため、日本に関する発表や交流の中で日本に関する話を聞くと、それぞれの生徒の方々が本当に様々な理由で日本学科を選んでいることを知り非常に驚きました。もとは韓国について興味があったという人が数人いたほか、勤務環境を考えると日本の会社には就職したくないという人もいると知り驚いたと同時に、私自身が日本学科の生徒さんに対して漠然と「日本が大好きな外国人」というイメージを勝手に作り上げていたことに気づかされました。さすがに日本が嫌いだと言う人はいませんでしたが、近年テレビやインターネット上においていわゆる「日本オタクの外国人」というようなテーマで様々な紹介が増えている中で、日本の社会や文化のことを好きでいてくれる外国人の方がいるという事実を超え、ある種盲目的に「魅力あふれる日本」を内面化することは、案外身近な落とし穴であるのも知れない、とこのようなことを通して感じました。しかし、興味のある日本の事柄について話してくださる日本学科の皆さんは本当に楽しそうで、素直に日本人としてとても嬉しいことであり、一から日本語を勉強し学科内では日本語を話す彼らを見て、自身の学業についてのモチベーションも非常に高まり、とても良い刺激を受けることが出来ました。

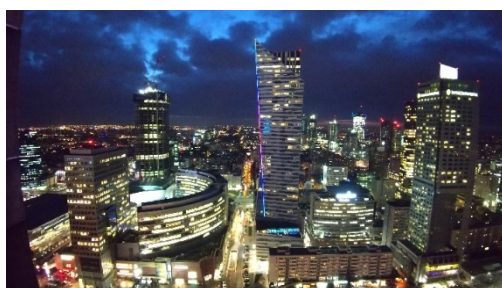
2. 校外学習(アウシュヴィッツ＝ビルナケウ強制収容所)

今回の研修において私たちは、ワルシャワのほかにクラクフに3日間滞在し、その間アウシュヴィッツ＝ビルナケウ強制収容所を訪れました。アウシュヴィッツという地名は私たちにとって常識といっても過言ではないほど聞き覚えがあると思いますが、ナチスドイツによる強制収容所はアウシュヴィッツだけではなく各地に点々と存在し、またそれらの施設は隠蔽のためあまり人目につかない場所にあったといわれています。そして今回アウシュヴィッツの次に訪れたビルナケウの施設は、非常に広大な敷地面積を持つ強制収容所であり、門からまっすぐに続く貨物列車の線路や、その線路を使って当時ユダヤ人たちをこの場所に輸送した実際の貨物列車等、生々しい痕跡が残る場所でした。

アウシュヴィッツの強制収容所にも当時の証拠品や迫害の痕跡が収容所の建物内に展示されており、収容された人々がどのような手順を踏んでガス室に送られるかの解説や、当時ここに送られてきた人々からナチスが没収したおびただしい数の洋服や、トランクや眼鏡などの生活用品、果ては遺体から刈り取った頭髪の束が私たちの視界を埋め尽くすように山積みになっており、その場所で今まで本や写真越しでは伝わらなかった圧倒的な数をかなりダイレクトに、目を逸らすことなど出来ない距離で直視させられると、私は言葉も出ませんでした。そして、そのような目をそむけたくなるほど凄惨な行為がドイツという高度な文明を誇った社会で、民主主義によって選ばれた政権によって実現したという事実が、さらに強い感情を抱かせました。そして当時、ガス室で膨大な数の人間の命を奪ったのは虫を駆除するための殺虫剤でした。日本で選挙権が18歳以上に引き下げられてから若者を政治に参加させようという動きが強まる中、当時のドイツでも傍観者の存在が政治の方向に陰ながら大きな影響を及ぼしていたということを知り、傍観し迎合することや無関心であること自体が、人間が人間を殺虫剤で殺すという事態を実現させるのだという恐ろしい事実を改めて痛感させられました。これから私たちや次の世代の人々が歴史を学んでいくなかで、このような体験ができる場所を残していくという行為は非常に重要なことであると強く感じました。

3. 新型コロナウイルスの影響と感じたこと

私たちがワルシャワに滞在して1～2週間ほど経つと、町中でその影響が肌で感じられるようになりました。すれ違う人物に上着で口を覆う身振りをされたり、新型コロナウイルスに関することを大声で言われたりといったようなことが数回あり、はじめは気にしないよう努めていたものの、自衛の気持ちもあってだんだんと視界を狭めて下を向くようになり、人の目の多い場所に行くことに対して若干の苦手意識のようなものが芽生え始めました。数日間だけではありませんでしたが、この経験は前述したようなナチスドイツによるものを含む人間の差別や迫害と全くの無関係ではないと私は思っています。しかし、このような時期にそういった心理を体感したことはある意味で貴重なことであり、心の深い部分で学びを得ることが出来たという点でかけがえのないものでした。今回の研修はそのような意味でも、忘れがたい体験になりました。



(写真2枚：ワルシャワで撮影)

ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部人文科学科 比較歴史学コース 2年

1910105 安藤優衣

1. 授業内容

1か月の間、ポーランド語、ポーランド歴史、ポーランド文化、英語によるポーランド文化の授業を受けました。他にもアウシュヴィッツ収容所の見学や博物館で現地の学生さんに説明してもらい学びを深める時間があり、これらすべての根幹には平和学習という目標がありました。

もっとも授業時間の多かったポーランド語の授業では日本語が話せる学生さんにABCのような基礎から丁寧に教えていただきました。英語と共通の部分があるとはいえ、文の作りがほかの言語とは全く違っても難しく感じましたが、構造から学ぶことで日本語の特徴や作りについての発見があり、言語を学ぶ楽しさを感じることができました。また、学んだ言語を街中で使い人々とコミュニケーションが取れるようになると自信が付き、生活や人との関わりがより一層楽しめて積極的になれたと思います。

ポーランド歴史の授業は現地に到着してすぐに行われたため、得た知識がその後の学習に大いに力を発揮してくれました。ポーランドの歴史については事前に本を読むことで流れは勉強していましたが、ポーランド分割や第二次大戦中のことなど、今思えば表面部分しか分かっていなかったように思います。授業を通して「何が理由でこの事象が起こったのか」「その時人々は何を考えて行動していたか」といった奥深い部分や“大昔から積み重ねてきた歴史”を理解することができ、思考の幅のようなものが広がったと感じています。ポーランド文化の授業では日本学科の皆さんにポーランドの文化を紹介していただき、様々な文化や習慣の存在を知るだけでなく、ポーランドの人々にとってのそれらの位置づけを知ることができました。

そして平和学習に最も影響を与えたのが博物館見学とアウシュヴィッツ=ビルケナウ収容所の見学です。ポーランドは歴史を後世に伝えていこう、過去にあったことを忘れないという思いがどの国よりも強いのではないかと感じるほどに、衝撃を受ける内容ばかりでした。ワルシャワ蜂起博物館やユダヤ人歴史博物館ではポーランドの繁栄とともに迫害や侵略などの歴史の暗い側面、さらに理不尽に立ち向かおうとする人々がいたことを学びました。ポーランド史ではどうしても暗い面が目立ってしましますが、だからこそ政治や国際関係の問題、その裏に存在する差別の問題など、現代の人々に投げかけられるものがあるのだらうと思いました。収容所の見学は何もかもが衝撃でした。悲惨、残酷としか言いようのない不合理極まりない仕打ちを受けていた人々が、約80年前に存在していたという事に鳥肌が止まりませんでした。現地唯一の日本人ガイドである中谷さんに案内していただき、本当に多くのこと、現代において考えさせられることを投げかけていただきま

した。決して忘れてはならない、油断したら再び同じことが起こるというメッセージを持って帰ってくることができ、自分には何ができるのかを考えるきっかけになりました。

2. その他課外活動

休日にはワルシャワ内をめぐり、日本とは違った感性に触れるように努めました。歴史的建造物や博物館に行き日本のものとの違い、共通点に注目することで一部ではありますが文化や歴史を吸収できたと思います。

そして現地の学生さんやその他の人々とも積極的にかかわることを意識しました。元々授業外では積極的にかかわりに行ける方ではありませんが、この機会に絶対に学生さんと交流したいと思っていたため積極的に声をかけてみました。最初は緊張しましたが、優しい方ばかりで「〇〇に一緒に行こうよ!」と言ってくれる友達もできました。「日本のこういうところってどう思う?」と聞いたり、お互いの国の文化や社会問題まで話せる友人ができ、本当に嬉しく、一生の宝物だと感じています。

3. 生活全般

到着してすぐは右も左も分からず、特に夜になると様々な不安が襲ってきましたが、英語の感覚にも慣れて現地の人と関われる心の余裕ができると、あらゆることを楽しめるようになりました。お店の人は親切で、ポーランド語で挨拶したりお礼を言うととてもうれしそうにしてくれたり、バスに乗ると外国人であるにもかかわらず席を譲ってくれようとする人がいたり、道できょろきょろとしていると声をかけてくれた人もいました。学生さんはもちろんのこと、多くの人々の善意に支えられて生活できていることを感じました。また、授業内で学んだことを街に出て実際に目にする、机上だけの学びではないためとても充実感がありました。最後にはポーランド語で買い物までできるようになり、自信もつきました。今回の留学で世界広くとらえるのも狭くしてしまうのも全て自分次第ということに気づきました。平和学習を含め新たな知識だけでなく、積極性や今までと違ったもの見方を得られたこの1か月は、とても貴重でした。大学生のうちにポーランドに行くことができ本当に良かったと心の底から思います。初めての海外でしたが、挑戦してよかったです。



写真左：ワルシャワ大学日本学科の友人とランチ



右：収容所の見学にて かつて収容される人々を乗せた乗り物が到着した場所

ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部 人文科学科
学籍番号 1610120 木村真央

授業内容

主にポーランド語の授業と、ポーランド文化・歴史を学ぶ授業を受けた。ポーランド語の授業は少人数かつ、日本語で授業をしてくださったので、難しい言語だと言われているこの言語でも難しいと思うことなく、学ぶことができた。近いうちにポーランド語の検定を受けたいと思う。歴史は、日本からワルシャワ大学にプライベートで研究に来ている先生（日本人）から教わった。先生は、カリキュラムはその場で決めるとおっしゃっていたので、学生の課外授業の希望に合わせて、大学周辺の歴史建造物や博物館を使って、現地ならではの学習ができてよかった。主にポーランド建国の歴史とユダヤ人について学んだ。しかしこれらについて研修生が事前に学んでいないと聞いて驚かれていた、かつこの研修の動機について疑問に思われていたようなので、日本である程度一括して学んでくる機会が研修で必要だったのではないかと考えられる。ポーランドの文化の授業は英語で行われた。しかし、内容は歴史の授業とほぼ同じだったので、理解できないという事態にはならなかったが、果たしてこの時間は今回の留学で適切なプログラムなのか疑問には思った。（事前に大学同士でどういった連絡を取られていたのか？腑に落ちない場面が多々ありました。）またポーランド映画の授業も英語であった。熱意を持って教えてくださるいい先生に出会えて幸運だったと思う。時間割がずっと学校にいて講義を聞くのみで、内容も日本で学べることが大半で、パンフレットにあった学習内容のように、現地学生との交流が盛んではなく、期待と大きく異なっていた。しかしながら、何事にも通じるが、能動的な行動と明確な目標を持って参加することで満足いく留学になると今回特に確信した良い機会だった。

現地の様子について

特にワルシャワはかなり住みやすい町だと思った。生活必需品は十分に揃っており食事も困ることはなかった。特に物価は東京に比べて安く、生活費も予想よりかからなかった。ただ、衣料品は外資のブランドが多く、比較的高価（東京と同じぐらい）で、現地のブランドのものは基本的に質が悪かった。アジア人は他のヨーロッパ地域の首都に比べて少ない。南西寄りの街は地中海系の人が多く、北のほうはドイツ系の人が多くいるように感じた（主観）。渡航当初、アジア系に対する差別も表立ってはなかったが、新型コロナウイルスの感染が拡大していくと状況が一変したので、一概に差別意識が全くない国だとは言いきれない。親日国だと言われている国に滞在する日本人全てに言えることだが、立場をわきまえて、節度を持った行動をするのが必要だと思われる。大学教授でさえも、このことに関して適切

ではないと思われる表現をされていたので、各個人が意識して冷静な行動をするのが大事である。

生活全般

言葉は英語で基本的に通じる。ポーランドの伝統料理のチェーン店では一人か二人外国人対応の人がいた。留学では野菜が不足しがちだが、この研修で野菜不足を感じたことはなかった。健康食品もスーパーで多く売られていた。ポーランドの料理は油が多いと言われているが、中華系の油というより、オリーブオイルに近い油だったので、胃もたれはなかった。乳製品が豊富で、日本では高タンパク食品として豆腐を食すが、現地ではカッテージチーズが日常的に食べられていた。海外の医薬品は体に合わないと言われるが、不具合は感じなかった。喫煙率は男女ともに高く、路上喫煙はかなり多かった。喘息の人には厳しいかもしれない。天気は常に曇りか雨なので、フード付きのコートが必須だった。さらに基本的に下を向いて歩かざるをえない気候だったので、気分が鬱々としやすいと感じた。ユダヤ人墓地がワルシャワの北側にあり、その辺りは治安が悪いように感じたが、それ以外は夜間でも基本的に安全だった。ただ、最新の iPhone を使っているのは日本人ぐらいで少々目立つようだったので、置き引きやスリなどには気をつけたほうが良さそうだった。カード払いが基本だが、チップ文化もあるので、現金は必要だった。これは個人差があるが、特に激しい戦地になったところや、ユダヤ人収容地域、墓地の付近、特定の日時で日本以上に調子が悪くなったので、過ごしにくいかもしれない。博物館も当時のものをかなりの数で揃えているので、見学するときは注意が必要だと思われる。



ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1910125 木村 ころろ

1, 授業内容について

今回の研修では、主にポーランド語、ポーランド歴史、ポーランド文化に関する授業を受講した。授業を通して最も学びが大きかったと感じるのは、ポーランド語である。ポーランド語は、今まで触れたことのない言語だったため、最初は難しさばかりを感じていた。授業以外の日常生活の中でも耳に入ってくるのは聞きなれない言葉ばかりで、戸惑いを感じていた。しかし、授業担当であるモニカ先生の熱心な指導と、「ポーランド語を少しでも理解できるようになりたい。」という前向きな姿勢のおかげで、徐々にポーランド語に対する心理的な壁が解消し、1ヶ月間を通してポーランド語に親しむことができた。

とはいっても、1ヶ月という短期間でポーランド語を習得することはほとんど不可能だろう。私にとって最も収穫だったのは、ポーランド語の語学力向上というよりも、ポーランド語の学習を通して、まったく知らなかったものに対して前向きにアプローチし、変化していく自分を楽しむという経験を得られたことだと感じている。母語ではない言語を学び、使いこなせるようになるというのは、どんな言語であっても難しい。語学力の向上には、時間も労力も必要である。しかし、「学ぶ」ということに対して積極的になり、ある程度の時間と労力を割くことによって、努力する前の自分から一歩成長した、新しい自分に出会うことができるのではないだろうか。今回の研修を通して、学ぶことの重要性和楽しさを再発見できたことは、今後の大学生活を送るうえで大きな意味をもつと考えている。

2, ワルシャワ大学日本学科の学生たちとの交流について

今回の研修では、ワルシャワ大学日本学科の学生の方々と交流する機会が多かった。上で述べたポーランド文化の授業も、日本学科の学生の方々がポーランド文化をプレゼンテーション形式で紹介するという内容のものだった。私が最も驚いたのは、日本学科の学生の方々の日本語がとても上手だったことである。授業内でのプレゼンテーションはもちろんのこと、積極的に発表に対して積極的に質



疑応答する姿や、私たち留学生に笑顔で話しかけてくれる姿は、日本人である私から見てもとても「日本人」らしかった。私が学生の方々から学んだのは、互いを理解しようという姿勢をきちんと見せていくことが、コミュニケーションや相互理解には不可欠であるということだ。日本学科の学生たちは、積極的に質問をしていた。それは授業内にとどまらず、一緒にご飯を食べているときのようなプライベートな場でも多く見られた。日本学科の学生たちが様々な質問をしてくれたおかげで、同じ時間を過ごしていても、場の雰囲気が活気あふれるものとなり、親睦もより深まった。相手に「あなたのことがもっと知りたい」という姿勢を見せるため、一方的に話したり聞いたりするのではなく、その場にいる全員がコミュニケーションに参加できる環境を作り出すために、質問をするという方法はとても効果があると感じた。コミュニケーションに対する学生たちの前向きな姿勢が彼らの日本語の上達につながっていると感じ、自分自身の外国語学習のモチベーションが高まったことも大きな収穫だった。

3. 課外活動について

授業のない土日、また平日の授業終わりには、ワルシャワ大学の学生の方々にご飯を食べたり、博物館・美術館を訪問したり、町中を散策したり、ちょっとした旅行に出かけたりにして、ポーランド研修を満喫することができた。特に、週末に計画を練って出かけたヴロツワフという町での経験が印象深い。旧市街の風景は絵本のように、至る所に建てられている教会や重要文化財に思う存分触れることができた。また、町中にたくさんの小人のオブジェがあり、ほっこりとした気持ちになった。課外活動は、特にプログラムで決められているわけではないため、自分の興味に合った時間を過ごすことができた。反対の言い方をすると、自分で計画したり、自分で積極的に調べて出かけたらしないと、何も無い時間になってしまう。私は今回の目的の一つである美術館・博物館の見学がたくさんできたため、自分で積極的に行動してよかったと感じている。

今回の研修では、プログラムに直結する（授業で取り扱った）内容だけではなく、様々な経験を通して、間接的に多くのことを学ぶことができた。いつも通りの生活の中では気が付かなかったことに気づく視点も、今回の研修で得ることができた。今回の経験や学び、刺激を心に留め、より充実した大学生活を送っていきたい。



ワルシャワ大学研修を終えて

生活科学部人間生活学科
学籍番号 1930435 藤田こころ

1. 留学して発見したこと

私が今回ポーランドに留学して発見したことは、ポーランドが非常に親日国ということだ。日本とポーランドは距離的には非常に離れているが、日本人以上に日本の文化に詳しい人や、日本に興味を持っている人がいる、ということが分かった。日本人として自国にこんなにも関心を抱いてくれているという事実がとても嬉しかった。私はポーランド人の学生と話しをしていて、日本の文化について切り込んだ質問をされても自信をもって答えられない場面もあった。自国の文化なのに知識がないことに焦りを感じる。適当な知識ではなく、外国人である彼らが納得するような情報を自分に取り込む必要がある。

ポーランド人は社会問題や世界情勢に関して深い知見がある。意見を求められたときに、瞬時に自分の意見を述べることができない自分を恥ずかしく感じた。私は自分が学生という身分であるのに、一生懸命勉強することを放棄しているような気もした。彼らと話していて得られる情報や考え方は非常に素晴らしいものであった。自分とは異なる地域に住んでいる人たちは、世界に対する見方や見る方向が違って自分の視野の狭さと偏りが存在することに気づいた。今後世の中を見るときに無意識に自分の偏見で物を図っていないか、第三者の目で自分を顧みようと思う。

また、彼らは英語が堪能である。ポーランド人学生たちとインビジブル展覧会に行った際、英語で解説がなされた時に彼らは積極的に手を挙げ、英語で質問をしていた。私は、ガイドの英語を聞き取ることだけで精一杯であったため、質問を考える余裕も、質問を英語に翻訳する余裕もなかった。私たちはお互い第二か国語として英語を勉強してきたはずであるのに、どうしてこんなにも違いがあるのだろうか、と疑問に感じた。

2. 生活面

ポーランドでの生活で困ることは特になかった。なぜならポーランド人の多くが英語を話せたからだ。私たちはポーランド語を話すことができなかったが、英語で接客や会話をしてくださったので特に困る、とは感じなかった。

3. 留学して得た知見

私は今回ポーランドに留学して、差別というものがいまだ目に見える形で存在することを知った。日本にいと気づかない、ヨーロッパの中に属し国民の大半がポーランド人であるポーランド、コロナウイルスが広がっている中で生活したからこそ感じる事ができた

体験であると思う。差別というものは、こんなにも人を嫌な気持ちにさせるものなのか、自己卑下の感覚につながるものなのか、と私は思った。ただの視線、周囲の人と話している様子や、小さな行動の一つひとつに過敏になってしまった時もあった。差別によって自分に自信が持てなくなる一方で、少しの気づかいや親切に心があつたかくなる出来事もあった。日本でも、自分は自国民であるために気づいていないだけで差別があるのかもしれない、自分もしてしまっているのかもしれないという視点を得た。自分が外国人という立場で 1 か月暮らすことで、得ることができた感覚は自分にとって非常によい経験になったと思う。この経験を今後の日本での生活や勉強に生かしていきたい。



旧市街

ワルシャワ大学研修を終えて

ジェンダー社会科学学科
学籍番号 1940412 俣テイ玉

授業内容



図1 ポーランド史の授業

短期留学プログラムにより、2020年2月18日～3月15日の約4週間、ポーランドのワルシャワ大学に滞在しました。ワルシャワ大学では、ポーランド語、ポーランド史、ポーランド文化、ポーランド映画などの授業カリキュラムが組み立てられており、非常に充実した留学プログラムでした。ポーランド史の授業では、教室内の講義だけでなく、吉岡先生にワルシャワの旧市街やユダヤ博物館などを案内していただき、ポーランドの歴史をより多角的視点から理解することができました。ポーランド文化の授業では、ポーランド

人学生のプレゼンテーションやポーランド人学生とのディスカッションなどの交流を通して、ポーランドの教育システム、芸術、音楽、映画など、ポーランド全般の文化を深く学ぶことができました。そして、英語で行われたポーランド映画の授業では、面白い様々なポーランド映画を鑑賞しました。

課外活動など



図2 アウシュヴィッツ強制収容所

ポーランドでの課外活動の中で、アウシュヴィッツ強制収容所を訪問したことが一番印象的でした。寒く曇った日の午後、アウシュヴィッツに到着しました。収容所を歩いていると、映画のような情景が広がっていましたが、映画とも異なる実感が湧いてきました。特に、コロナウイルスが流行っている現在の情勢

の中では、当時の

ユダヤ人の境遇をより深く考えさせられました。そして、クラクフ (Krakow) という街では、日本美術等を収蔵しているマンガ美術館 (Manggha Museum) を訪れました。映画監督アンジェイ・ワイダの作品を始め、



図3 マンガ美術館

様々な現代芸術の展示会も行っており、特に美術館の壁に書いてあった「There is another world, but it is in this one」という文章に感動しました。

生活全般



図4 ワジェンキ公園

ヨーロッパへ行くのは初めてでしたが、ワルシャワでの一ヶ月間の生活では、不便とを感じる部分はほとんどありませんでした。ショパン空港から大学の寮までバスで約40分、寮から大学まで約15分間です。寮は二人部屋ですが、スペースは十分でした。寮の隣には、ワジェンキ公園 (Lazienki Park) というワルシャワで一番大きい公園があります。晴れの日、公園内を散歩するのもとても楽しかったです。

最後に

今回の短期研修では、いままでできていない貴重な経験が本当にたくさん得られました。今後の研究に生かしていきたいと思います。そして、今回の研修を支えてくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。

ワルシャワ大学への留学

文教育学部 言語文化学科

1910265 藤井美聡

授業内容

日本語によってポーランド語やポーランドの歴史の授業を受けました。またワルシャワ大学日本語学科の学生からポーランドの文化や生活についてプレゼンテーションを受けたり、ゲームやダンスを通じて交流を深めました。ポーランドのアートについて学ぶ英語による講義も週に1, 2回ありましたが授業はほとんど日本語でした。基本的に講義を受ける形式が多く、発表をしたりディスカッションをする機会はありませんでした。お茶大のワルシャワ大学への派遣が今回が初めてであり、先生方もお茶大生がどのような授業を求めているのか分からない中で私達の要望を尋ねそれに応えようとしてくださいました。また授業によってキャンパスをバスで移動しなければならないこともあり、時間がぎりぎりできついことが何度かありました。

課外活動

授業以外の時間、放課後・週末に関して特に用意されているプログラムはあまりなかったので自分たちで積極的に計画を立てて行動する必要がありました。留学中に週末が3回あり、そのうち3回目の週末はクラクフへ旅行しアウシュビッツへ行くことが決まっていました。私は1回目の週末をチェコ、2回目の週末をドイツへ友達と旅行しました。EU圏内とはいえ、言語も通貨も交通機関に利用方法など違っていて驚きました。友達に頼りっぱなしでしたが、貴重な経験をたくさんしてとてもよい旅行となりました。放課後は仲良くなった日本語学科のポーランド人の友達とご飯を食べに行ったり、友達とワルシャワを観光して過ごしました。また疲れた時は寮へ戻り休むようにして体調を管理しました。

生活

基本的に2人1部屋の寮に泊まっていました。寮は古くてトイレの鍵がなかったり、すぐWIFIがきれるなどトラブルはあったものの暖房の設備はしっかりしていて寒いと感じることはありませんでした。1つのフロアに共有でミニキッチンとシャワーが付いており、みんなで譲り合って使いました。フロアにはお茶大生以外に一般の方も宿泊していましたが皆親切でした。寮から大学へはバスで15分ほどでした。ポーランドはバスが発達していて基本的に移動はバスでした。食事は寮の下にあるレストランを利用すると割り引いてもらえてお得でしたが、外で外食したりスーパーで現地のご飯を食べるのもおもしろかったです。ポーランドは物価が日本の2分の1から3分の1ほどなので金銭的には全く大丈夫

でした。またすごく寒いと聞いていたけれど、寒さは日本と大して変わらなかったです。コロナウイルスが途中から流行したことで少し居づらさを感じることはありましたが、基本ポーランドはかなり親日家の国で日本人に優しくしてくれることが多いと知られています。



ワルシャワ大学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科

1910437 水越日向子

はじめに

ポーランドは、第二次世界大戦で甚大な被害を受けた国で、今もなお戦争の惨禍を伝える遺産が多く残っていることで有名です。私は、そんなポーランドの地で平和について学ぶために今回の研修に参加しました。新型コロナウイルス感染症の流行により不安もありましたが、本学の国際教育センターの皆さまやワルシャワ大学の先生方にご尽力いただき、充実した日々を過ごし無事研修を終えることができましたことを心より感謝申し上げます。今回、本レポートにおいてワルシャワ大学研修での経験を下記の通り報告します。

授業を通じて学んだこと

授業はステイ先からバスで10分ほどの距離に位置する、ワルシャワ大学東洋学部日本学科のキャンパスで行われました。1コマ90分の授業が週に12コマ程度あり、ポーランド語やポーランド史、ポーランド文化といったポーランド全般について、日本語や英語の講義形式で学びました。

特に印象的だったのがポーランド文化の授業です。この授業では、日本学科の学生によるプレゼンテーションの形式で現地の文化を学びました。東欧ポーランドの文化は、日本文化に慣れ親しんだ私にとってまさに異文化であり、多々良い意味でのカルチャーショックを受けました。自分の常識は世界の常識ではないことを知り、柔軟な考え方の必要性を実感する貴重な機会になったと感じます。また、日本について研究されている日本学科の皆さんから、「海外から見た日本」という視点を学べたのも大きな収穫でした。留学前はポーランド文化を学ぶことばかりに気を取られていましたが、実際は現地の文化を学びながら無意識のうちに日本文化と比較することで、今まで気付かなかった日本文化の良い点をたくさん発見できました。意図せず日本から離れた場所で日本を知ることができたことをとても興味深く思います。

課外活動

授業の無い土日や空きコマを利用して、ワルシャワを観光したり、日本学科の学生の皆さんとご飯を食べたりしました。ワルシャワ市内はバスでの移動が主流で、他にはトラム（路面電車）や地下鉄などが通っています。1ヶ月定期券を発行すればバス、トラム、地下鉄の全ての交通



機関を利用できるので、ポーランドに行かれる際は定期券の発行をおすすめします。

主要観光地が集まるワルシャワ中心部はそこまで広くなく、上記の交通機関を利用してほぼ全ての観光地を見学することができました。なかでも印象的だったのが右の写真の旧市街です。このワルシャワ旧市街は、第二次世界大戦で一度は壊滅状態になったものの、その後市民の手で再建されたことで有名で、世界遺産にも登録されています。カラフルな街並みがとても美しく、ワルシャワ市民の平和への思いがひしひしと伝わってくる場所でした。その他にも、ワルシャワ蜂起博物館やポーランド・ユダヤ人歴史博物館など、戦争の歴史を伝えるスポットが数多くあり、非常に勉強になりました。

平和学習

今回の研修で最も印象に残っているのが、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所跡の見学です。アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所は、ナチス・ドイツによる最大級の強制収容所であり、ホロコーストの象徴とされています。ユダヤ人をはじめ、ポーランド人、ジプシー、ソ連軍捕虜など推定約130万人が収容され、そのうち推定約110万人が亡くなりました。

収容所跡は現在博物館になっており、ガス室やバラックなどが当時のまま残されているほか、数千もの遺品が展示されています。なかでも衝撃的だったのが、2トン近くもある女性の犠牲者の髪の毛の展示です。数字だけでは一体どのくらいの人が犠牲になったのか想像しにくかったのですが、おびただしい髪の毛の山を目の当たりにして言葉を失いました。

案内してくださった中谷剛さんによると、収容所の生還者の方が追悼式典で「アウシュヴィッツは空から降ってきたわけではなく、この悲劇は再び起こりうる」と語られたそうです。今回の留学中、新型コロナウイルスによるアジア人差別が急速に広まり、私たちも卑劣な言葉を浴びせられたり、あからさまに嫌な顔をされたりといった差別を受けました。人種差別を身をもって体験したことで、生還者の方の言葉の意味が少し分かった気がします。博物館にはナチス・ドイツに関する展示がほとんどありません。それは、アウシュヴィッツの悲劇はナチスだけの責任ではないと捉えられているからです。差別を容認し、問題を深刻化させてしまうのは、考えることをやめた一般市民です。差別が社会全体へ伝播し重大な問題を引き起こすことを防ぐために、私たち一人ひとりが周りに流されずに自分の意思を持つことが重要だと学びました。

今回、アウシュヴィッツを訪問し中谷さんのお話を聞いて、私も無意識のうちに大衆に迎合し、誰かを傷つけていることに気付きました。自分の無知さ、愚かさを恥ずかしく思います。周りに流されず、自分の意思を持って行動できるようになるためには、勉学に励み、幅広い知識を得ることが不可欠です。猶予のある学生生活のうちに様々な場所へ赴き、今回のように机上だけでは分からない学びを得たいと強く思いました。

終わりに

今回の研修で、書ききれないほど多くのことを学びました。この時期に参加できて本当に良かったです。この地で学んだことを糧に勉学に励みたいと思います。





カリフォルニア大学デービス校 (アメリカ)

研修期間：2020年2月13日～3月13日（4週間）

滞在：ホームステイ

研修内容：英語研修、アメリカ文化学習

カリフォルニア大学デービス校の研修を終えて

生活科学部人間環境科学科

1830205 神鳥茜

私は、2020年2月から1ヶ月間カリフォルニア大学デービス校に留学し、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。そう思えた理由は3点あります。

1. 授業について

私は、自分の英語のスキルアップとその国の文化や生活、価値観などを知りたいという思いから、CCPプログラムを選択しました。しかし、元々英語が苦手科目であった私は、留学するにあたって自分の英語力についていくことができるかどうかとても不安を感じていました。しかし、初めに留學生のレベル分けテストがあり、自分のレベルに合った授業が受けられるということ、また、すべて英語で行われる授業ながらも質問したら何度も丁寧に答えてくださった



り、授業以外でも話しかけてコミュニケーションをとってくださる先生が多く、私でもついていくことが出来ました。また、授業の内容としては自分の国と違うと思った文化のテーマを定め、実際に現地の学生にインタビューをし、その結果から分析して発表するなど、実際にコミュニケーションをとっていく上で、英語やアメリカ合衆国の文化を学べるようなもので、常に楽しく主体的に授業を受けることが出来ました。

2. カリフォルニア大学デービス校やその周りの環境について

名門であるカリフォルニア大学デービス校はとても学習するのに恵まれていた環境であったと思います。キャンパスがとても広く、自転車を使っても一周するのに一苦労するほどです。留學生も使うことができる図書館や学食、ジムやボーリング場などの施設がとても充実していました。また、自然が多く芝生や花などがキャンパス内にたくさんあり、のびのびとした雰囲気です。そのような雰囲気の中で過ごす留學生は、とても優しくたり親切である方が多かったです。私は学校の授業以外でも、JASS (Japanese American Student Society) というサークル活動に参加していたの



ですが、短期間しか参加することが出来ず、英語も稚拙な私にも優しく、フレンドリーに受け入れてくれました。学生同士で話していても、私に「今話していること聞き取れる？」と確認をしてくれて、私が「半分くらいはわかるよ！」と答えると、「すごいね！でももう少しゆっくり話してみるね」といった風にコミュニケーションをとってくれたのです。優しく接してくれた友達にとっても感謝しています。また、デービスの気候はとても雨が少なく、朝夜は多少冷え込むものの、冬でも温暖で過ごしやすかったです。私が過ごした1ヶ月間のうち雨が降った日はわずか2、3日でした。施設が充実していたり、人が親切なのは大学内だけではありませんでした。デービスの街全体には学生が無料でのれるバスが多く路線で走っていて、どこに行くにも便利でした。また、自転車が主要な交通手段として根付いており、交通整備が整えられていたため、安心して自転車で通学することが出来ました。大学の近くには小さいながらも栄えているダウンタウンがあり、放課後には友達とおいしい食事を食べたり、甘いものを食べたりと楽しい時間を過ごすことが出来ます。休日には、映画館やバスを使ってサクラメントまで出かけたりアウトレットに行くこともできました。

3. ホームステイについて

私が留学の中で一番貴重で大切な経験になったと感じた時間はホストファミリーとの時間でした。とても明るく、優しい方々で私を家族の一員として扱ってくださり、いろいろな経験をさせて頂きました。週末には、サンフランシスコや、シエラという山の中にあるコテージに連れて行ってくださったり、親戚とのホームパーティーにも参加させてくださってとても楽しい思い出となりました。ホストファミリーのおかげでカリフォルニア州のことが好きになり、またいつかこの土地にきたい、住みたいと思えるようになりました。また、彼らの職業が教授や先生であることから、いろいろなことを教えて頂きました。アメリカ人の価値観や、アメリカの政治のこと、食事のこと、地理のこと、正しい発音や文法など書ききれません。教えて

いただいた中で特に素敵だなと印象に残ったことは、アメリカ人は独立や自立を大切にするという価値観です。日本の価値観と大きく異なった価値観であり、お互いに良いところを取り入れていければなと感じました。また、ホストシスターに7歳の女の子がいて、その子と最も多くの時間を過ごし楽しい時間を過ごしました。彼女は、小さい子供なので、英語の発音や文法が少しでも間違っていると”Why?” ”What are you saying?” など疑問



をダイレクトに返してくれるので、とても文法の勉強になりました。学校の課題で絵本と一緒に読むと、小学生レベルの絵本でも聞いたことがないような単語が出てきたりなど、とても語彙力を増やす勉強になったと思います。また、彼女のいともよく家に遊びにきて一緒に遊ぶことが出来ました。英語の歌と一緒に歌ったり、カードゲームをしたりとても楽しかったです。別れ際の時には、手紙をプレゼントしてくれて今でも部屋に飾っています。

4. まとめ

このように授業だけでなく、様々な経験をすることが出来たカリフォルニア大学デービス校で過ごした一ヶ月間は私にとってとても貴重で自分を成長させるきっかけになったと思います。たった一ヶ月間で急激に英語が伸びるということはないけれど、英語を使ったコミュニケーションの楽しさや、カリフォルニアの素敵な文化や価値観、素晴らしい人々と触れ合えて、これからもっと英語の学習を頑張っていこうという意識が芽生えました。また、実際に会話してみて、どういった点で通じないのか、何を勉強すればもっと自分の意見を伝えられるようになるのか、また、そもそも自分の伝えたい意見や考えとは何なのかを考えることができるようになりました。また将来、旅行や仕事などでカリフォルニアに行き、彼らと話せる機会があれば、またもっと新しい人々に触れ合えればいいなと強く思います。

UNIVERSITY OF CALIFORNIA UC RIVERSIDE



カリフォルニア大学リバーサイド (アメリカ)

研修期間：開始日・期間選択制

滞在：ホームステイ/大学寮

研修内容：英語研修、アメリカ文化学習

カリフォルニア大学リバーサイド校での短期研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1910271 松本 あゆみ

<授業について>

授業は2週間で1moduleという単位で開講されていました。普段の授業はTED Talkをメインにした教科書に基づいて、リスニング・文法の学習だけでなくディスカッションなどもある授業で多面的に学習できたように感じています。また、授業の最終課題にはプレゼンとライティングがありました。私のクラスは半年やそれ以上長期で留学している人が多く単語などのレベルも高く感じて自分がついていけるのか不安でしたが、逆にポジティブに捉えると知らない単語を多く学ぶことができるとともによりレベルの高い人たちと勉強することで自分のモチベーションもあがったので、こうした授業の環境は自分にとってとてもプラスになったと思いました。

<課外活動>

授業後にある学校のアクティビティには積極的に参加しました。特にCoffee Hoursではメインキャンパスに行き、たくさんのUCRの学生と交流することができました。初めは言いたいことをうまく伝えられるか不安に思っていたのですが、とても楽しい時間を過ごすことができました。また学校のアクティビティでは、行く先でアメリカの文化や歴史などについて知り、理解を深めることができ興味深かったです。週末には友達とディズニーランドやユニバーサルスタジオなどにも行くことができとても楽しい休日を過ごすことができました。

<ホストファミリーとの生活>

ホストファミリーは毎日の学校までの送り迎えや食事の用意など、とても親切にしてくれました。それだけでなく食事のあとは一緒にテレビや映画をみて、週末には外食でメキシコ料理のお店やお勧めのハンバーガーのお店に連れて行ってくれました。一番印象に残っているのは、ホストファミリーの孫のコンサートに連れて行ってもらったことです。高校生たちのステージだったのですが、現地の高校生の歌やダンスのパフォーマンスに迫力があって、とても楽しい時間を過ごすことができました。最初は慣れない環境で緊張していましたが、優しいファミリーのおかげで打ち解けることができ、とても充実したアメリカの生活を体験することができて本当によかったです。



ホストファミリーの孫のコンサートを見に行った時の写真



お勧めのハンバーガーのお店で一緒にランチを食べた時の写真

カリフォルニア大学リバーサイド校研修を終えて

生活科学部 人間・環境科学科

1930221 松野桃佳

1 はじめに

私は、カリフォルニア大学リバーサイド校に二週間留学した。以前からホームステイなどを通して文化の異なる人々と交流したいと考えていたため、今回初めての海外留学を決意した。また、英語の発音に自信がないため、話す能力を向上させるということも今回の留学の目的の一つである。

2 留学の記録

①授業内容

オリエンテーションの日にクラス分けのテストがあり、授業はクラスごとに異なる教科書をもとにして進められた。私のクラスでは、TED TALK を聞いて、テーマについてディスカッションをしたり、内容に関する文法や語彙を学んだりした。ディスカッションでは、自分の立場を明確にし、意見をすぐに英語に変換しなければいけないことにはじめは苦戦した。しかし、質問に対し丁寧に回答してくれる先生や私の拙い英語を真剣に聞いてくれるクラスメートのおかげで、与えられたテーマに対して自分の考えを明確に持つこと、それを素早く英語に変換して口に出すことの大切さを学ぶことができた。

②課外活動

毎週木曜日に行われるコーヒーアワーでは、カリフォルニア大学リバーサイド校のメインキャンパスに通う様々な国籍の学生と交流し、会話を楽しむことができた。有名なハンバーガーショップに連れて行ってくれたり、今でも連絡を取り合ったりするほど仲の良い友人ができて嬉しかった。

金曜日は大学主催のツアーに参加した。一回目は Mt. Rubidoux でハイキングをした。写真のように頂上からはリバーサイドが一望でき、良い眺めだった。二回目は Citrus Park に行った。リバーサイドでたくさんのオレンジが栽培されている理由と歴史について知ることができた。

週末はカリフォルニアのディズニールンドやショッピングモールに行って楽しい時間を過ごすことができた。



③ホームステイ

ホストファミリーは本当に素敵な家族だった。毎日おいしいご飯を作ってくれて、メキシコ料理も教えてくれた。一緒に買い物に行ったり、夜には家で映画を見たりした。日本とアメリカの文化や気候の違いについて話して、毎日ホストファミリーから新しいことを学ぶことが出来た。出発の日は悲しかったけれど、いつでも帰ってきてねと言ってくれて嬉しかった。私はホストファミリーにとっても感謝しているし、また絶対に会いに行くつもりだ。



3 おわりに

今回の留学はあっという間で、本当に有意義な二週間を過ごすことができた。英語に対する学習意欲が向上しただけでなく、将来の職業選択の幅が広がった。もう一度、次は長期で留学したい。

UCR での研修を終えて

文教育学部言語文化学科

1510223 木下奈旺

①授業内容

月曜日は授業がなく、基本的に火曜日から金曜日の 9:00～12:00 しか授業はありません。クラスメイトたちは 13:00～15:00 の授業をとっている人も多く、その人たちと遊ぶためにはその時間を待たなければならず、かなり暇な時間が多かったです。わたしのクラスメイトは全部で 16 人、中国人、韓国人、日本人、クエート人、インド人でした。2 週間ごとに人が入れ替わります。テストは 1 週間に一度、2 週間に一度エッセイの提出か、プレゼンテーションがありました。エッセイもプレゼンテーションも、その期間に習った単語や文法を使う必要があり、習ったことをすぐにアウトプットできるいい機会になりました。

②課外活動について

土曜日にスクールトリップという形で、学校のバスでカリフォルニアディズニーランドやユニバーサルスタジオハリウッド、サンディエゴのシーワールドなどに連れて行ってくれるツアーが開催されていました。大学からバスで送り迎えをしてくれるので楽ですが、少し高いような気がしました。また、リバーサイド周辺は RTA というバスが通っていて、その無料パスを学校でもらえました。そのため、バスでの移動は無料でできます(かなり時間がかかりますが)。また、Uber もかなり普及しており、アプリを入れてクレジットカードの番号を登録すると、現金を使わずに済む上、使うたびにメールで領収書が送られてきて、とても便利でした。土日にはロサンゼルスまで 10 ドルで往復できる電車の乗車券があります。駅は大学からバスで 10 分くらいでした。そのため私は、それを利用して土日にはロサンゼルスによく行きました。

③ホームステイについて

わたしがホームステイしていたところは学校から 30 分ほど離れた家でした。かなり広く、一人で暮らすには十分な部屋だな、という印象です。バスタブがついていて、洗濯機もいつ使ってもいいと言われました。しかし、ホストファミリーの仕事が朝早かったため、かなり早い時間に学校に送られ、朝とても暇でした。ホストファミリーによって本当にそれぞれ違うので、行ってみないとわからないです。しかし、ホストファミリーとして生徒を受け入れることに慣れている家庭が多く、友達にもホストファミリーと問題がある子はいなかったもので、基本的には安心していいと思います。

④食べ物について

わたしのホームステイ先は、朝と昼は自分で作り、夜はファミリーが作ってくれました。食材はファミリーが用意してくれて、自分で作ることができたので、健康的な食事ができたと思います。醤油はアメリカにも普通に売っているのですが、日本から持って行かなくても大丈夫です。持って行ってよかったのは、コンソメとほんだしです。夜ご飯はハンバーガーやタコス、ホットドッグなどが主に出ました。アメリカでの食事は野菜が少ないので、意識的に野菜を摂らないといけないと感じました。

⑤お金について

現金はほとんど必要ありません。逆にいうと、基本的に全てカードで払えるので、カードの上限額には注意が必要です。日本からしかカード上限額の増額ができないカード会社もあるので、必ず出国前に確認することをお勧めします。現金を使うときは、ホームステイ先にお金を払うときと、友達と一緒にご飯を食べたときに友達にわたしたときくらいでした。

今回の研修は半年や一年の長期研修とは違い、飛躍的に英語力が上がったという感覚は正直あまりありませんでした。ですが、日本では知り合うことができない人とたくさん知り合うことができたことが一番の収穫です。これからも連絡を取り続けたいです。



カリフォルニア大学リバーサイド校研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1810289 若森 咲葉

*授業について

初日に1時間ほどのテストを受け、7段階にクラス分けがされます。私は上から2番目で、日本人3人、中国からの生徒3人、韓国が2人、アラブ系が3人の11人クラスでした。教科書をオリエンテーションの時に買って、speaking, grammar, listeningそれぞれの分野を学びます。Listeningは基本的にTEDのリスニングです。パートナーと確認し、くじで生徒が当てられる、という流れも日本での授業とあまり変わりません。ただパートナーは基本的に母国が違う人なので、答えやその根拠の確認は全て英語である点が日本と大きく違います。Speakingについては、メインとして一つのかかなり具体的で実践的な背景（発言の途中で遮る人を含めた話し合いをまとめる、言いづらいをお願いをする）を、ロールプレイング形式で、教科書に載っているフレーズを用いて練習しました。自分とは違う国の生徒とパートナーになってレコーディングするので、ただ順番に読むというよりも実際の会話の中でどのように使うか、という実践的な能力を身につけることができました。grammarについては受験で文法を多くやる日本人には馴染みの問題が多かったように思います。listeningやspeakingは外国人生徒の方ができている、と引け目に感じるが多かったのですが文法は彼らよりできることも多いと感じました。この特徴は周りの日本人の生徒も多く感じており、日本は主に受験のために文法ばかりやっているからな、国ごとの英語教育の特性を興味深く思いました。宿題は毎日出るのですが、内容が明確でとても分かりやすいです。基本的には、新出単語の学習、授業中に新しく習った事項の確認やTEDのリスニング予習が多いです。授業中に英語を書く、読む上でのスキルも学ぶのですが、聞いて分かったつもりになっても宿題で実践問題が出ると分からないということがあります。私も一度分からなかったのですが事前に教えられていた先生のメールアドレス宛に質問すると驚くほどに丁寧に返信が来ました。質問をすることで、より深く英語を学ぶ上で役立つスキル（inference, summary, paraphrase）などを英語で学び、そして実践することができました。

*授業外の活動・生活全般について

基本的に私は授業が火曜から金曜の午前だけなので、授業外の時間もたくさんありました。まず平日について、多くの人が昼食をカフェテリアで取るのですが午後の活動については、授業がある生徒とない生徒で分かれています。まず午前みのクラスをとっている人向けの大学主催のアクティビティについて説明します。事前に申し込みをすると、週に二回ほ

ど近くの観光・学習スポットのシャトルバスに乗って行くことができます。私はマウント・ルビドーという小高い丘でハイキングを楽しんだり、シトラスパークという様々な柑橘系の果実を育てているセンターでカリフォルニアの歴史を学んだりしました。また、シャトルバスはアクティビティだけでなく平日二日間近くのスーパーにも出ています。私は寮で生活していたので、安く食料を手に入れられるスーパーに行ってもらえるのは助かりました。アメリカのスーパーは全てが巨大かつ大量だったので見るだけでも本当に楽しかったです。土日は一日時間があるので、特に寮の人は何か予定を入れた方がいいです。私は大学のツアーでサンタバーバラに観光に行ったり、シーワールドという遊園地に行ったりしました。外国の生徒もいるサンタバーバラでは韓国と中国の女の子と1日回ることができたのですが、後にその子の誕生日会に招待してもらったり、二人きりで1日ロサンゼルスを観光できたりと更に留学中に充実した時間を過ごせるきっかけにもなりました。

*寮での生活 (International Village) について

私は寮生活を選んだので、寮での生活について紹介します。基本的には一つの部屋に共同スペース、その両側にベッドルームがあります。一つのベッドルームに二人が生活するため、本来ルームメイトは4人なのですが私の場合もう一つのルームにメインキャンパスの学生が住んでおり、生活リズムも違うため残念ながらあまり関わりはありませんでした。生活に必要な食料などは全て自分で用意する必要がありますが、逆に好きなようにできるので寮での生活はかなり快適でした。欠点としては、週一ペースで火災報知器が作動しけたたましい音とともに強制的に外に出されること、部屋によっては隣人がうるさいこと、やはり自己負担が多くお金がかかることです。しかし設備に不備があれば書類を提出すればすぐ対応してもらえ、どこか出かける時などに寮に住んでいると、他の外国人生徒と待ち合わせも楽で共に行動できたりするのはかなりよかったです。また授業を行う建物から徒歩2分なので移動が本当に楽でした。



授業のクラスメート・先生との写真(最終日)



クラスメートのバースデーパーティでの写真



南オレゴン大学（アメリカ）

研修期間：2020年2月22日～3月15日（3週間）

滞在：ホームステイ

研修内容：英語研修、アメリカ文化学習

南オレゴン大学研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科

1930111 小林 葉月那

*授業内容

平日の午前中 3 時間に英語の授業を受けた。主に午後のアクティビティに関する内容を題材とした授業が多かった。レストランでの会話練習や劇のシナリオを読む授業があった。少し情報を得た上でのアクティビティ参加ができるため、毎日の楽しく授業に参加することができた。海外の人に聞き取ってもらえる名前の発音の仕方を学ぶ授業が面白かった。英語の発音ではアクセントが重要になるため、自分の名前も抑揚をつける必要があり、習った後に実践すると上手く伝えられて嬉しかった。語りかけや質問に対して積極的に応えていく姿勢が大切だし、自分の英語力を高めることにもつなげることができる。

*アクティビティ

平日の午後のアクティビティが決まっているプログラムを探していた私にはぴったりだった。Shakespeare の観劇や大学でのコンサートなどの芸術に触れるものや、Crater Lake でのスノーシューイング、Redwood や Table Rock でのハイキングなど自然の中での活動、Harry&David ツアーやチーズファクトリーなど食べ物工場見学など様々なアクティビティがあった。大自然に囲まれたオレゴン州で毎日ワクワクする初体験ばかりだった。この環境の中だからこそできることばかりで、たくさんの学びがあるし、自分のすきを探すことができた。午前中にアクティビティの予習のようなことをできるので、基礎情報を知って行う活動をさらに充実した時間にできた。

*日常生活

最初のホストファミリーの突然の用事で、ありがたいことに3つのホストファミリーを体験することができた。1つ目のホストファミリーはクリシタンの老夫婦で、毎ごはんの前にはみんなで手を繋いで祈ったり、日曜日には教会に行ったりした。教会にはスクリーンがあり、歌を歌う時にはカラオケのようだった。教会にも現代的なものが取り入れられていることにとっても驚いた。2つ目のホストファミリーは5歳の娘がいる家族で、一緒に絵を描いたりぬいぐるみで遊んだりした。夜にはお互いの国のトランプを教え合って、みんなで盛り上がった。3つ目のホストファミリーは、定年を迎えた旦那さんとバリバリキャリアウーマンの奥さんの日本食が大好きな夫婦だった。アメリカらしいものを食べたいという私の要望を聞いてくれて、旦那さんが毎食作ってくれた。チョコレートナッツブラウニーが特に絶品で、気に入った様子を見てサプライズで最終日にも作ってくれた。それぞれの家で生活リ

ズムが全く違い、様々なアメリカンスタイルを体験できた。ホストファミリー側からいろんな質問をしてくれるし、自分から話そうという意欲を見せると真剣に聞いてくれるため、詰まるのを恐れずに日常的に英語を使うことができた。一緒にごはんを食べる時間が一番楽しかった。

*最後に

初のアメリカ大陸で午後のアクティビティが決まっているものを探していた私にとってピッタリのプログラムだった。オレゴン州は朝夜と昼の寒暖差が大きいですが、自然が溢れ、澄んだ空気に包まれて過ごした毎日だった。私はアメリカ人のフレンドリーでフランクな態度を求めて行ったため、そんな人々に囲まれて過ごす3週間はとても楽しく、あつという間だった。海外に行くことで自分の母国、日本を改めて見る視点を持つことができるし、自分を見つめ直す時間となる。たくさんの人やものと出会い、たくさんの方に気づき、たくさんの発見をした日々だった。全てに感謝でいっぱい。これからさらに多くの国へ行き、自分の視野を広げていきたい。





MONASH College



モナシュ大学（オーストラリア）

研修期間：2020年2月17日～3月13日（4週間）

滞在：ホームステイ

研修内容：英語・オーストラリア文化体験

モナシュ大学研修を終えて

生活科学部 人間・環境科学科

1930210 柴尾 映里奈

授業内容

ホームレス問題や多文化共生社会など、日本で勉強する機会の少ない抽象的な話題を取り扱っていた。授業内容に関連して、調査をして調査報告を書く、調査したことについてペアでプレゼンテーションをする、エッセイを書く、個人プレゼンテーションをする、という大きな4つの課題が課された。これが思っていたよりも大変で、いかに自分が Writing、Speaking が苦手なのか痛感せざるを得なかった。いい経験であった。

このプログラムにはお茶大以外の国立大6校も参加していて、クラスは大学混合で英語力によって分けられていた。1クラス16人くらい。同じくらいの実力の友人とともに先生の英語を必死に聞き取り、話しながら授業は進んだ。授業中に日本語で喋ると In English, please? と先生に言われてしまうのでみんな頑張って英単語を捻り出していた。現地にいた時は「クラスに同じくらいの英語力の人しかいないから、先生が言っていることが聞き取れなかった時は困るね」と言っていたが、飛び抜けて英語のできる人がいたら、きっとその人を頼り切っていただろうなと今になって思う。良い環境で勉強できて幸せだ。

右のスクリーンショットは授業中にやったクイズで一番をとったときのものである。Kahoot というのだが、これが結構白熱していて楽しかった。つまり何がしたいのかというと、モナシュの授業はただの座学じゃなくて、たのしくて、良い。



えりな

4761

週末

コロナの影響であちらの大学の新学期が始まるのが延期されていたので、あまり現地の学生さんに関わる機会がなく、週末は観光して歩いた。大学の近くにホームステイしていたが、街中まで出るのには一時間半ほどかかった。City は遠い。それでも何度も遊びに行ったのは、それだけ Melbourne city が魅力的だったからだ。観光するところはたくさんあるし、何より café が多い。オーストラリアの café は朝 7:30 とか 8:00 に開店して、17:00 にはもう閉まってしまう。だから私たちは週末は6時におきて朝から素晴らしい食事を食べに出掛けた。とても幸せな時間であった。



3週目の週末は、Victoria州のLabour Dayの関係で三連休だった。私たちはそれを利用してSydney旅行をした。Airbnbというものを使って安い宿を探し、格安の飛行機に乗って旅費を抑えた、短く、大学生らしい安い旅だったが、これがとんでもなく楽しかった。Sydney Opera Houseにはもちろん足を運んだ。Japanese Tourがあり、まだまだ英語の不安なわたしたちにはありがたかった。また、交通費がとても安かったので何度もフェリーに乗った。左の写真はフェリーの上から撮ったものである。よく撮れていると自分でも思う。もちろんcaféにも足を運んだ。オーストラリアでもfish & chipsはメジャーな食べ物なのだが、Sydney MCA caféのfish & chipsがとても美味しかった。次オーストラリアへ行く時もまた訪れたい。

ホームステイ生活

オーストラリアはいろいろな人種の人が住んでいる多文化国家である。私のホストファミリーはマレーシアの人だった。彼らはとても優しく、部屋も設備が整っていて綺麗で、恵まれていたと思う。夕ご飯にはなんと日本米が毎食出てきたので、日本食が恋しくなることは一度もなかった。夕ご飯を食べた後、リビングへ遊びに行くとホストファザーがテレビでYouTubeを見ていて、旅行好きな彼はよくいろいろな国の紹介動画を見せてお話を話して聞かせてくれた。もちろん、課題をやらなくてはいけない日もあったので、そんな日は部屋に籠もっていた。みんな言うが、部屋にいるとホストファミリーは一切干渉してこない。強いて言うなら遅刻しそうな朝とかは起こしに来るかもしれない。だから、話したいのであれば自分からすり寄って行って無理やりにも話題をふっかけることが必要不可欠であった。

1つ、少しだけ後悔していることがある。私はもともと口数が少なく、車の中や食事中は喋らないのだが、オーストラリアでもそうしてしまった。ホストファミリーは無理やり話しかけてくるような人たちではなかったから、ただただ静かに車に乗り、ご飯を食べた。話題はなんでもいいからもっと話したかったな、と思う。もしこれを読んでいる人で、留学をしたくて、でも普段はあんまりおしゃべりするのが好きじゃない人がいるなら、海外にいた間だけでもたくさんおしゃべりしたほうがいいよ、と伝えたい。

最後に

Consortiumは「留学したい、でも1年はちょっと怖い」という人が、英語を学びたい！という意欲を手に入れるのにとっても良いプログラムであると思う。私はこの一ヶ月を通して自分のやりたいこと、なりたい姿の輪郭を得た。行ってよかったと心から思っている。

モナシュ大学短期留学（2/15～3/16）を終えて

文教育学部 人間社会科学科 1年
学籍番号 1910417 酒匂のどか

1, 授業内容

モナシュでの授業は、第1週がホームレス、第2週が環境問題、第3週が多文化社会、第4週がグローバリズムと分かれており、隔週でそれぞれのテーマに沿った課題が出されたり、フィールドワークがあったりした。

ホームレスに関して、私は当初、メルボルンは移民が多いので、彼らに対する福祉政策の反動として非移民の若者が仕事を失うことが原因だと考えていた。しかし、授業の中でわかったことは、ホームレスになる理由はもっと多様で、移民であろうとなかろうと誰でもホームレスになる可能性があるということである。ホームレスになる第一の原因としては、土地と家の値段が異常に高いことがある。毎年上がり続ける家賃と土地代が払えない者は、安い共同住宅に移り住むことになる。しかしそこではキッチンやトイレを共有しなければならず、住居人との関係が悪化すれば暴力を振るわれ家を失うことになる。また第二の理由としては、原住民や移民に対する差別があることである。非原住民と比べて、アボリジニやトレス諸島民といった原住民がホームレスになる確率は遙かに高い。これは家を貸す業者が彼らに対して差別をしており簡単に家が借りられない状況を作り出しているからである。またいくら多文化国家といっても人種ごとの差別は根強くある。地域によって住む人種が分かれており、異なる国の人々が引っ越してくれば地域住民から反発を受け場合によっては引っ越しを余儀なくさせられる。それは白豪主義時代のように有色人種ばかりが差別を受けるのではなく、状況によっては欧米系の人々が中国人やアフリカ系の人から差別される逆差別も存在している。ホームレスとなった人は街で座りこみ自作の看板を掲げ、食べ物やお金を人びとに要求していた。日本とは違い、シティではホームレスの姿を見かけることが日常でありそれだけホームレスの数が深刻化していることを実感させられた。

モナシュでの授業はオーストラリアの社会問題を学びながら英語を話したり書いたりする能力を伸ばすもので、授業中は発言したり生徒同士で話し合ったりする機会が数多くあった。日本人同士なので Japanese English になっていた気はするが、英語を話すのに慣れ自分の意見を英語で伝える練習としてはいい機会だったと思う。

2, 放課後や休日

大学での授業は大抵1時に終わるので、その後は友達と予定を合わせて外出したりホストファミリーと時間を過ごしたりすることが多かった。一番よく行ったのはバスと電車で1時間ほどかかるシティである。メルボルンの一番の中心地で観光名所やレストランがた

くさんあり、動物園や水族館、マーケットにいった。その中で印象に残ったこととしては、街を歩いていると英語だけでなく中国語や韓国語、スペイン語や日本語などたくさんの言語が聞こえてくることである。公用語が英語であることを一瞬忘れそうなほど様々な言語をはなす人びとがおり、多様性を実感した。それだけ世界各国から人が集まっていればレストランや土産物屋も色々な国のものがあり、世界を縮約した街であるような印象を受けた。

3, ホームステイ先での生活

私はこの1ヶ月間、ギリシャ系のシングルマザーの家に滞在させていただいた。彼女は働きながら専門学校に通いホストとして留学生を受け入れるという多忙な毎日を送っていたが、私が学校から帰るたびに「今日はどうだった？」と声をかけてくれ、非常にあたたかい雰囲気を作ってくれた。食後はいつも二人で紅茶を飲みながら色々なことを話し、英語の練習に大いに役立ったと思うしオーストラリアの社会問題や政治問題について解説を加えてくれた。台所や冷蔵庫は自由に使って良かったので、私は時折日本風の食事を作りマザーにたべてもらうこともあった。最初は少し緊張があったが、だんだん自分の家と同じようにくつろぐことができ、とても心安らぐ環境にいられたことを本当に感謝したい。



モナシュ大学研修を終えて

理学部生物学科

1920420 田島実のり

私がこの語学研修に参加した理由は英語のスピーキング力を上げたかったからである。また、私は大学か大学院に在籍している間に長期留学に行ってみたく思っているので今回の研修がそのためのステップとなるだろうと思って参加した。私のモナシュ大学での研修を授業、放課後や休日、ホームステイの観点からそれぞれ振り返ろうと思う。

まずはモナシュ大学での授業についてである。モナシュ大学では、授業は週ごとにテーマが決められており、それについてグループでディスカッションしたり、プレゼンテーションをするという内容だった。テーマはオーストラリアでのホームレスの問題や環境問題、多文化主義、グローバル化の四つであり、それぞれの課題や現状についての自分の意見や、私たちはどうするべきなのかなどを英語で話し合った。ディスカッションは受け身の授業と異なり、自分の頭で積極的に考えることが必要でとても楽しかった。また、自分の意見を英語で伝えるのは難しく、相手に伝えるために日本語で話してしまうこともあった（クラスは日本人の生徒だけだった）が、自分がこの研修に参加した目的を忘れずに、失敗を恥ずかしくがらず英語でたくさん発言するようにしていた。その結果、クラスの中で MVP のような賞をいただくことができた。

次に休日や放課後などの授業時間外の過ごし方を振り返る。授業時間外は、メルボルン市内の観光をしていて、メルボルン動物園や水族館、ビーチ、ショッピングセンター、マーケットなどたくさんの場所に友達と行った。授業は午前で終わるので、放課後も期間が多くあり、多くのところに行って美味しいものを食べたり、綺麗な景色を見たりすることができた。特に楽しかったものを挙げると、クラスのみんなで St. Kilda Beach に行つてバーベキューをしたことだ。（写真1）オーストラリアで有名なビーチを楽しめただけでなく、地元のスーパーでの買い物が体験でき、さらにクラスのみんなとの仲を深めることができた。また、これらは自分たちで計画して行くので、現地の公共交通機関を体験したり、現地の店員の方とお話する機会が多くなった。授業では当たり前だが観光の時間はほとんどなかったの、この時間が、ホストファミリーや学校の先生以外でネイティブの英語に触れるいい機会になった。

次にホームステイの様子を振り返る。私は中学生の時に一度オーストラリアでのホームステイを体験しているので、オーストラリアの生活スタイル（シャワーの時間が短い、寝る時間が早いなど）や、ホームステイがどのような感じかはあらかじめわかっている、比較的スムーズにホームステイを始められたと思う。今回のホストファミリーはユダヤ教のイスラエルの方々だった。（写真2）ホームステイの間に、伝統的な中東の食事や宗教の

ことなど、自分が知らなかった文化をたくさん教えてくださった。オーストラリアは移民が多く、様々な文化の人がいるということをもっと知ることができた。また、ホストファミリーとのコミュニケーションについては英語でなんていうのかわからない時や、相手が言ったことが聞き取れなかった時に素直にそう伝えることで自分の英語のスピーキング力が上がったと思う。なぜなら、わからないと伝えるとホストファミリーが正しい表現の仕方や単語を教えてくれたり、言ったことをもう一度繰り返してくれたりしたからである。始めは質問が多かったり、途切れ途切れだった私の英語も、ホストファミリーのおかげで最後の方は、前よりもつなげて話せるようになった。

この研修を通して、私は様々なことを吸収して成長することが出来た。私の目的であった英語のスピーキング力の向上は達成できた。間違えることや、分からないことを恥ずかしがらずにたくさん英語を話すことができたということもそうだが、間違えてもいい環境を作ってくれたり、正しい表現を教えてくださった先生やクラスメイト、ホストファミリーのおかげだと思う。この研修で英語をもっと流暢に話せるようになりたいと強く思ったのでこれからも英語を使う機会を作ったり、利用して英語のスキルを向上させていきたい。また、今回の研修では英語だけでなく、環境問題や社会問題についてきちんと自分の頭で考えて行動して行くことが大切だと感じた。授業で初めて知る事実も多く、自分はそのための知識が足りないとプログラム期間中に常に思っていたので、自分の専攻している分野だけでなく様々な問題に対していつもアンテナを張って、他人事とは思わずにそれについてどうしたら良いのかを考えようと思った。私をこの研修に参加させてくれた家族や、研修のフォローをしてくださった国際センターの方々、現地の先生、ホストファミリー、友達、関わってくださった全ての方にとっても感謝している。この経験を無駄にせずしっかり活かしてこれからの生活を過ごそうと思う。



写真 1 クラスメイトとのバーベキューの様子



写真 2 ホストファミリーとの写真

モナシュ大学研修を終えて

理学部 数学科

1920111 佐藤 結奈

・授業内容

モナシュ大学での授業は日本の他大学の学生と一緒に英語の授業を受けるもので、内容はグループワーク、ディスカッションがメインで普段日本では少ない体系の授業を英語でたくさん受けることができて良かった。自分の意見を短時間で考えてまとめて、すぐに英語で人に伝える、というのは最初は難しかったが毎回の授業を通して、自分の意見をはっきりいうのは新鮮で楽しいと思った。ネイティブの先生もすごくゆっくり話して下さり聞き取れないことがほとんどなく自分のレベルにあっていたと思う。ただ、クラスの友達が全員日本人なので日本人同士で英語で話す機会が多かった。日本人同士で英語で会話をしていても会話のスピードや間の取り方がネイティブとは異なってしまうので、授業でのネイティブスピーカーとの会話や交流の場面が欲しかった。

・ホームステイ

私の家のご両親に娘が四人いる家庭だった。イスラム教の家庭で心配していたがみんな優しく、すぐに馴染めた。豚肉やアルコールが禁止されているので外食は全くせず毎日料理を作ってくれた。最初の一週間は中身は違うが毎日カレーで少し驚いた。そしてお母さんはカレーライスを手で食べていてさらに驚いた。カレーは香辛料から作っている感じでパクチーが入っていて最初は慣れなかったが美味しかった。ロティ、というナンもお母さんが手作りしていてすごいなと思った。お母さんは四人の娘達とあなたは同じだからといってとても優しく接してくれた。四人の姉妹は仲がよくて、お母さんの手伝いをよくしていて、夫婦も仲が良くていい家庭だなと思った。ホストマザーに朝食を一回作ってあげたのだが、なんと家族全員分と来客一人、自分の八人分のご飯を作った。本当は米を使った朝食を作ってあげたかったがパンがいいとのリクエストだったので洋風になってしまった。スープを八人分も作ったことがなかったのでもうまくいくか心配していたが気に入ってもらえて良かった。



・クラス

クラスは大阪、九州、埼玉、学芸大学の生徒がいて4週間ともにディスカッションしたりランチを食べたり、プレゼンをしたり、ゲームをしたりとても仲良くなった。他大学との交流はすごく新鮮でお互いのホストファミリーの話や持ってくるランチの違いなどで話がすごく盛り上がった。授業中は英語だか遊びに行くときは日本人の友達と日本語を話していたので、初めての留学にはストレスやホームシックを感じずに過ごせるので良かったと思う。授業内容は小学生みたいなことが多かったがすごく充実した毎日を送ることができた。クラス全員や先生方、みんなに心から感謝できる一ヶ月だった。



・交通手段

メルボルンのバスは30分くらい遅れることもあれば来ないこともあって最初は大変驚いた。また、バス内のアナウンスもなくてずっとスマホの位置情報で確認しなければなくてとても大変だった。電車やバスでも大きな声で電話したり食べたりしているのは日本とは違うことだと思った。

また、現地の人はバスを乗るときに運転手さんに挨拶し、降りるときにありがとう！と大声で言っているのも日本では考えられないことなので驚いたし、すごく温かい人たちだと自分もすぐに真似した。バスの中でもオーストラリアの人々の社交的で温かい気持ちを感じることができて良かった。

モナシュ大学研修を終えて

生活科学部 人間・環境科学科
学籍番号 1830202 太田麻衣子

私は2020年2月17日から3月16日まで、オーストラリアのメルボルンで過ごしました。午前中は大学の授業を受け、午後は友達と課題をしたりメルボルンの中心市街地や、ショッピングモールに遊びに行ったりしました。土日は全休なので、自由にすごすことができました。なかにはホームステイの人たちがいろいろ連れて行ってくれる家庭もあり、過ごし方はホームステイ先によって違ってきます。このプログラムには日本の他の大学からの参加者もいて、クラスも様々な大学の人たちがいて、とても有意義でした。

授業内容

授業は全て英語で行われ、1週間ごとにテーマが変わっていくような形式でした。今回の留学では、ホームレス問題、環境問題、多文化社会、グローバル化社会の4テーマを扱いました。これらのテーマについて、宿題として自分の意見をクラスのフォーラムで共有したり、授業中に少人数で話し合ったりしました。先生の話聞いておかないとすぐに授業に取り残されてしまうので、何を言っているかわからなくても、とりあえず単語を拾ってかんがえました。そうすると完璧とは言わなくても大体の言いたいことがわかってきます。それでもわからないときはその都度聞くことも大切だと感じました。最終週には4人でポスター発表を行ったり、1人で約5分のプレゼンを行ったりしました。プレゼンの原稿は全て英語だったのですが、パワポや原稿の作り方を授業で教えてくれたので、作りやすかったです。

観光

主にメルボルンシティやショッピングセンターで過ごしました。メルボルンは市街地でも歴史的な建造物が多く、街並みが綺麗です。歩いているだけでも楽しかったです。あと、カフェが有名なので、いろいろなカフェにも行きました。その中でも、フラットホワイトというカフェラテの種類がオーストラリアの名物らしく、おいしかったのでよく飲んでいました。また、オーストラリアは島国なのでビーチがたくさんあり、4か所ものビーチに行きました。どのビーチもとても綺麗でした。3連休をつかってシドニーにも行きました。シドニーはメルボルンとはまた違って現代風の建物が多かったのですが、大きな港町には感動しました。また大人になってから訪れたいと思いました。



左図：メルボルンの Chelsea Beach

上図：シドニーのオペラハウス

ホームステイ

ホームステイは、オーストラリアで最も印象に残っていることのひとつです。私のホストファミリーはイタリア系の老夫婦2人でした。最初に会ったときはとても緊張しましたが、ホストマザーがいろいろ話しかけてくれて、ほっとしたうれしかったです。朝昼晩の食事をホストファミリーが用意してくれ、本当にどれも美味しかったです。食事の際にはオーストラリアのこと、家族のことなど、いろいろな話をしました。もちろん、私の家族のことや日本のこともいろいろ聞いてくれ、私を家族の一員として迎え入れてくれました。帰国するのが惜しかったです。ホストマザー、ホストファザーには感謝の気持ちでいっぱいです。ホームステイができて本当に良かったと思っています。

気を付けるべきこと

パソコンは大学に忘れずに持って行ってください。授業は全てパソコンで行うので、忘れると何もできません。simカードは現地で購入するのがおすすめです。現地購入のほうが値段が倍以上安いです。ポケットWi-Fiかsimカードのどちらかを持っていれば問題ないと思います。

これからモナシュに行く人たちは、目一杯楽しんでください！

モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1910104 安西 柚葉

【授業内容】

私が参加したオーストラリアにあるモナシュ大学の研修は、ほとんど全ての授業で自分のパソコンを利用するという特徴がありました。授業中に使用する資料はもちろん、課題の提出先や個別の連絡といった全てのことをオンライン上で実施します。日本の大学とは授業自体のスタイルが異なっていたため、慣れるまでに少し時間はかかりましたが、非常に利便性が高く時間の有効的な活用を学ぶことができました。

授業は全て英語で行われ、日本語での会話は基本禁止されています。週ごとに決められたテーマに沿って、先生が生徒一人一人に考えるきっかけを投げかけてくれます。それに英語でまずはじっくりと考え、英語で意見を交換し、英語で発表します。全てを英語で、そして自分で考えるのが授業の基本スタイルであったように記憶しています。またこういった授業形式のため、日本人の友人との会話も必然的に英語で行っていました。「英語」に特化した質の高い環境に身を置くため、最初は慣れなくても次第にスラスラと英語を話すことができます。

授業後の課題も多く、また明確な答えがない問いを考えることが多かったため大変な思いをすることも多々ありました。しかしいざ終えてみると、全てが自分を成長させるために非常に役に立っていたのだと気付きました。とてもやりがいのある授業であったように思います。

【アクティビティ】

モナシュ大学の研修では、クラスでの授業の他に外に出て行うアクティビティが多くありました。例えばオーストラリアで有名な動物園や鉄道を巡るツアーへの参加や、深刻な社会問題となっているホームレス問題に取り組む団体への訪問をすることができました。このように、教室内で行う授業という枠から一度離れ、外で実際に英語を使う機会に多く触れるチャンスがあったのは非常に良い経験だったと思います。

【生活全般】

今回の研修はホームステイでした。私はホームステイが初めての経験だったので、研修前は正直期待よりも不安の方が高かったです。しかし実際に約一ヶ月過ごしてみて、異文化に触れることの重要性をととも感じました。また、日常生活で英語を使う機会がホームステイのおかげでグッと高まりました。研修の授業以外で英語を使う場面に身を置くこと

は、自分の全体的な英語の力を向上させるのに非常に役立ったと考えます。とても貴重な経験ができました。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科

1910409 大城麻菜

<大学での授業>

このプログラムには、お茶大生のほかに一橋大学、東京学芸大学、埼玉大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学の学生が参加しており、渡航前に受けたテストの結果をもとにそれぞれ15人程度のクラスに振り分けられました。クラスのメンバーは全員日本人だったけれど、授業中はほとんど日本語を使いませんでした。授業形式は知識を教えてもらうような講義ではなく、先生も含めたクラスの人たちでトピックについて話し合ったり、調べたりしながら考えを深めていくような授業でした。プレゼンの授業もあり、全体的に人前で話す機会が多かったのですが、少人数でクラスの雰囲気も温かかったので、人前で話すことが苦手な私でも恐れずに発表することができました。授業のテーマは各週で決められており、ホームレス、環境問題、多文化社会、グローバル化など、主にオーストラリアで特に注目されている社会問題について学びました。正直あまりなじみのなかったテーマだったので、そもそも日本がどのようなになっているのかも全然知りませんでした。しかし、このような機会を経て、今まであまり考えてこなかったようなことについての現状を知り、真剣に考えることができたこと、また改めて自国のことでもまだまだ知らないことがたくさんあるということに気づくことができよかったです。課題については、各週にエッセイやプレゼンなどの大きいものがだいたい1つ出される具合でした。課題をこなすにはまあまあ時間がかかったけれど、その分自分の考えを深めたり、さらに新しい知識を学べたりする良い機会でした。

<課外活動について>

第2週のField Tripでは、3つの中から自分の好きなコースを選んで行くことができ、私はMornington Peninsulaという海に行きました。また、最終週にはPot luck dinnerというプログラム参加者とそのホストファミリーが参加できるパーティーがありました。ホストファミリーが持ちよせてくれた料理をみんなで食べたり、有志の人がステージに立ってパフォーマンスを披露したりと、とても楽しかったです。浴衣を着て参加したら、ホストファミリーの人が喜んでくれてうれしかったです。

授業は毎日午前中で終わるので、放課後はたくさん遊ぶことができました。メルボルンの観光名所は割とコンパクトにまとまっており、アクセスも良かったため観光しやすかったです。様々な観光地を回ることを通して、オーストラリアの文化や良さ、日本との違いに気づき、感じることができました。また、課外活動を通して、クラスメートとの仲も深めることができました。

<生活面について>

ホームステイで困ったことは特にありませんでした。ただ生活面という観点でいうと、電車が時間や曜日によって運行していなかったり、トラムが大幅に遅れていたりすることがありました。

食事はおいしく、栄養バランスも良かったです。また、早寝早起きで全体的に健康的な生活を送っていたと思います。

ホームステイ先は、ホストマザーだけの家庭でした。初めは自分の聞き取った英語に自信が持てず、何か聞かれても Yes としか返答できななかったり、無言になってしまったりしてとても気まずかったです。それでも頑張っって何か喋らないとと思い、文法も発音もぐちゃぐちゃなままとにかく喋ろうと頑張っていました。ホストマザーが毎回、私の本当に拙い英語を寛容に受け取ってくれたおかげで、だんだん英語を話すことへの抵抗感が薄くなり、ホストマザーと話すのが楽しくなりました。

<まとめ>

今回の研修は、確かにクラスメートはみな日本人であり、また1か月という短い期間であったため、努力不足によるところもあるかもしれませんが、個人的には英語力が見て取れるほど上がったわけではありませんでした。しかし、異国の地という異文化、また、ホームステイで言語も違う人と生活するという、様々な大学の学生と現地のスタイルの授業を受けるとのこと、普段の生活ではありえないほどたくさん遊び、お金を使うことといった、「非日常な生活」の中から気づき、学ぶこともたくさんありました。学問という観点以外からも、日本のことや自分のことについて、新たな気づきがたくさんあり、それらについてより深く知るきっかけとなりました。今回の研修で学んだこと、感じたことをこれからの日常生活に生かしていきたいと思います。



モナシュ大学研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科
学籍番号 1930137 山根 美里

1. 授業内容

一週間ごとにテーマが決められており、それについての知識を得たり、理解を深める。授業は8時半から10時半、10時45分から12時45分の2コマで構成されており、間には15分間の休憩が入る。午後は参加自由のセミナーや授業が行われる場合もあるが、全く授業がない場合もあるので、より多く授業を受けたい人は、積極的にそのセミナーなどに申し込んでいた。クラスは6クラスで構成され、それぞれのクラスに担当の教師が2人ずつつく。教師はみな、個性にあふれていて面白く、かつ学ぶべき大事なことは的確に教えてくださったので、楽しく、多くのものを得ることができる授業を受けることができた。授業はその週のテーマについて教師が質問して生徒が答えたり、生徒同士で話し合わせ、出た意見をクラス全体にシェアさせることを中心に展開された。クラスは全員日本人なので授業中にたまに日本語使ってしまうこともあるがほとんど英語で自分の意見を言う。

次に詳しい授業内容について紹介する。

- 一週間目 主にホームレスのことについて学んだ。火曜日にはホームレスのために活動をしている非営利団体の Big Issue を訪れた。オーストラリアは日本に比べてホームレスの数が多い。しかしながら、ホームレスに対する保護も手厚い。
- 二週間目 環境問題と持続可能な開発について学んだ。あるテーマにおいてアンケートを取って、レポートを書く課題があった。
- 三週間目 オーストラリアの多文化性について学んだ。オーストラリアはヨーロッパをはじめにアジア、アフリカ、南北アメリカなど様々な国の人は共存している。
- 四週間目 グローバル化について学んだ。

この週にはポスタープレゼンテーションとオーラルプレゼンテーションがあった。

2. ホームステイ

一人一家庭割り当てられる。私のホストファミリーはホストマザーのみでギリシャ系の家庭だった。ほかにも子供がいる家庭、中国系、インド系などオーストラリアが多文化国家なこともあり、お世話になる家庭の様子は多岐にわたっていた。料理も家庭によってさまざまであった。

私のマザーは毎日仕事や友達との遊びによって、出かけており、ディナー前に帰ってきていた。そのため、日中はマザーと接することはなかったが、マザーが帰ってきて夕食を食べた後、一緒にテレビを見たり、会話をしたりして楽しい時間を過ごすことができた。マザー

はとてもやさしいが、やさしいだけでなく厳しいところもあり、ほんとうの孫のように接してくださった。おかげで一度もさみしい思いをすることはなかった。

ホームステイ先の Wi-Fi は利用できるがその料金は事前に払う料金に含まれていなかったため、家庭によっては利用するにあたって、料金を請求されることがある。私は一週間につき 10\$ 払った。また、オーストラリアは水が貴重であるため、シャワーの時間を制限される場合がある。制限される場合 5 分~10 分が多い。これも家庭によるが、私の家庭は制限はなかった。

3. 観光

平日の午後や休日には友達と観光に行くことが多い。その観光地について紹介する。モナシユ大学から 1 時間のところにメルボルンシティがある。特にフリンダースストリート駅周辺には観光スポットが集まっている。Queen Victoria Market は南半球で最も大きな規模を誇る野外市場の一つ。肉、魚、野菜、果物、衣料品、お土産、雑貨が豊富にそろっており、見ているだけでも楽しめる。St Paul's Cathedral は無料で入ることのできる聖堂である。また、ウォールアートで有名な通りがある。行くたびに絵が変わるので 1 か月のうちに何回か行くと面白いかもしれない。Lune は世界一おいしいと言われるクロワッサンのお店。いくつか種類があり、何度行っても楽しめる。私は Traditional (Plane), Pan au choc, Armon の 3 種類のクロワッサンを食べた。それぞれ美味しかったが、Lune のクロワッサンのおいしさは Traditional を食べた時に一番感じやすかった。ほかにも、グレートオーシャンロードやフィリップ島、ブライトンビーチなども有名な観光スポットである。3 週目の週末は 3 連休だったのでそれを利用して、クラスの人とシドニーに旅行した。オペラハウスを見たり、バーベキューをしたり、朝にカフェに行ったりして充実した 3 日間だった。



4. まとめ

オーストラリアでの短期留学はとても有意義なものであった。大学における授業はとても充実していて、現地では学ぶことのできない多くの知識を得ることができた。また、自分の意見を英語で伝える貴重な機会であった。この研修のおかげで英語力は少し向上したように思える。さらに、英語の勉強に対するモチベーションが上がった。また、このプログラムでは同じ大学だけでなく、他大学の人とも知り合えて仲良くなれるという利点もある。様々な学科、方言、考えの人と接することができるので、自分を深めることができたと思う。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
学籍番号 1810261 馬場 千寛

<授業内容>

授業の内容はグローバリゼーションや環境問題、オーストラリア土着の文化についてでした。一週間で一つの定められたテーマについて掘り下げ、2、3人でディスカッションを行うことが多かったです。先生は皆、英語教育に精通された方ばかりだったので、わかりやすい英語で授業を行ってくれました。積極的に発言をしないと、研修に来ている意味がないと思ったのでそう励みましたが、英語で自分の意見を伝えることは思っていたよりも難しかったです。研修の最後には、パワーポイントを使って一人でプレゼンテーションを行うという課題もあり、やりがいがありました。COVID19が蔓延していたこともあり、現地の学生との交流はさほど設けられなかったことは残念でした。

<課外活動>

授業は大体お昼過ぎに終わるので、そのあとは前もって参加希望を出しておいた課外活動に行く人が多かったです。私はあまり申し込みをしていなかったのですが、生活に慣れてくるとやることもなくなってきた暇だなど思う日もあったので、いくつかは申し込んでおくといいかもしれないです。また、希望制ではない課外活動も隔週ほどで行われ、研修に参加した人がいくつかのグループに分かれて遠出する機会がありました。そこではオーストラリアの観光スポットに出かけられ、思い出づくりができました。

<生活全般>

授業よりも英語が上達しそうだなど感じたのはホームステイ先での交流です。寮かホームステイかの選択ができ、迷っている人は、ホームステイをすることを強く勧めたいです。その国の食生活を体験することができますし、何より授業で聞いている英語ではない生きた英語に触れることができるのはとても貴重だと思います。流暢さに加えてスラングも多く、何を言っているのかはさっぱりわかりませんが、本物の英語を聞くことにより、学習意欲も高まりました。また、現地の友達ができただけでも嬉しかったです。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
学籍番号 1810262 馬場 泉希

授業内容

英語の基本的な運用能力を高めながら、オーストラリアの歴史や時事問題について理解を深めた。具体的には、ホームレス問題・アボリジニーの文化・動物保護を含めた環境問題について、日本との比較からもアプローチした。教室では基本的に英語で話し、グループプレゼンテーションやインタビュー、ディスカッションなどの活動も行なった。大学から出てメルボルン市内や郊外のヤランバレーでフィールドトリップをするなど、座学だけでなく実際に目で見たり体験したりして学習する機会も多かった。

授業の準備や予習としての課題もあり、ほとんど半日で終わる授業も質の高いものになっていた。

成果としては、まず同じ日本人であるクラスメイトとの会話から自身の能力を客観的に評価し、足りないものを確認することができた。授業では特に「正しい話し方」を超えて「効果的な話し方」を学べたことが大きな成果だった。抑揚、間の取り方が重要であるということは日本語にも共通だが、その具体的なタイミングや程度、頻度などは英語圏でしか学べなかったと思う。

課外活動など

カリキュラムのほとんどが午前中だけの授業であり、放課後は選択して受けられる講義やパーティーがあった。同じ留学生と英語で会話するコースや、英会話のテクニックや練習方法など実践的な知識を得るためのコースなどがあった。英語運用能力に限らず、モナシュ大学について紹介するものもあり、実際に生徒が研究しているテーマを発表する講義などがあった。

我々留学生と生徒の交流にも重きを置いていて、授業の一環として互いに研究を発表しあったりするだけでなく、放課後にパーティーを開いて互いの特技を披露したりもした。ここで披露された出し物が、いわゆる典型的な「日本文化」「オーストラリア文化」でなかったことが印象的だった。これにより固定概念から個人をみることなく、個人から敷衍させる、よりリアルで自然な文化を学ぶことができた。

学校から提供されるこうした機会の他に、自由時間にも現地の人たちと関わることができた。学校のジムで一緒にバスケットボールをしたことは思い出深い。

生活全般

学校以外の学びとしては、休日の観光やホストファミリーとの交流が挙げられる。休日にはよくメルボルン市内を歩いたが、ここでは英語能力の向上と併せてメルボルンのフィールドワークを目的として人や建築物、交通の観察、分析に取り組んだ。中でも特徴的だったのは交通の「緩さ」である。公共交通機関では無銭乗車をよく見かけた。歩行者は市中であっても信号のない道路を横断している。週末には線路の工事の関係でバスが代行していた。これは二週間で観察し得た限りの情報であり誤認も否めないが、とにかく日本のような厳格さはなかった。もう少し時間があればこの特徴の原因についても深く考えたかった。

ホストファミリーとは、彼女が高齢であることもあり、観光に行くより家で過ごした方が多かった。長年オーストラリアに住む彼女の話からは、教科書では扱わないようなマイクロでリアルな情報をたくさん得ることができた。もっとも興味深かったのは「棲み分け」の話だった。多民族国家であるオーストラリア特有の人種的棲み分けについて、当時の社会情勢なども交えてクロノジカルに説明してくれた。人の移動、人種に特有の気性、経済的格差など、多くの要素が複雑に関係して現在の棲み分けを形成したということもとても面白かったが、その棲み分けが住居の構造や材料にも影響するというところまで知ることができた。この特徴は日本で見られるのか、相違点があるとしたらそれはどのようなもので何に起因しているか、疑問に思ったので以後考察していこうと思う。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 人文科学科

1910148 田村夏美

・出発前からの気持ちの変化

この短期留学はかなりの不安とともに始まりました。英語が得意ではない自分にとって1ヶ月間ホームステイしながら英語の勉強をするというのは自分にとって挑戦で、始まりが近づけば近づくほど不安が高まりました。そんな中留学がスタートし、初めの1週間はかなり辛い部分もありました。ホストファミリーとのコミュニケーションも満足にできず、自分の言いたいことがそのニュアンス通りに意思表示できないことに対するストレスから暗い気持ちになることもありました。しかし、ホストファミリーと過ごす時間が長くなりお互いの人柄がわかるようになってきたり、大学でクラスメイトと親交を深めるうちに、だんだんとその不安は払拭されていきました。1週間をすぎたあたりからは日々の生活が楽しくなり、充実した毎日過ごすことができました。大学での授業自体はそこまで重たいものではなく、放課後を利用して友達とさまざまな場所に行って文化に触れたり、ホストファミリーと一緒に買い物や料理をしたりと、いろいろな経験を得られました。一つ自分の反省点としては、ホストファミリーに日本料理を食べたいと言われたときに、普段料理を全くしないのになにも作れなかったことです。せめて卵焼きぐらい作れるようにしておけばよかったと思いました。

・成果

この1ヶ月の短期研修でもっとも得られたものは、語学力はもちろんですが、度胸や自信が1番ついたと思います。比較的安全と言われるオーストラリアで、自分で電車やバスに乗り、自分で様々なことを選択するのは良い経験になりました。オーストラリアの人はとても優しい人が多く、心地よい毎日を送れました。多文化主義な国だけあって様々な文化が混じり合っており、完全な異国というよりはアジアな部分を感じることも多くありました。そのおかげでつよいホームシックを感じることもなく過ごせました。長期留学を見据えてこの1ヶ月の研修をしようか悩んでいる方にはとてもおすすめです。語学力に関しては授業中に喋る機会をたくさんもらえるのでリスニング力とスピーキング力が主に身につくと思います。授業外でもさまざまなアクティビティが用意されているので楽しく英語に対するさまざまな知識をつけられます。また、このプログラムは大阪大や一橋大、九州大など他のさまざまな国公立大学の人と一緒に行われます。日本にいるだけでは知り合えない、志の高い人々と知り合いになれたことは本当に有意義でした。

・感謝と決意

今回の短期留学の前にはオーストラリアで大規模火災や洪水が発生し、行われるかも怪しい状況でした。そしてコロナウイルスにより、かなりの影響が懸念されましたが、たくさんの方の尽力のおかげで無事にさまざまな経験を得ることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。忘れられない1ヶ月になったと思います。この留学を英語学習の足がかりにして日本での時間をより効率的なものにできるように生かしていきたいと思います。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科

1810433 松嶋 玲菜

授業について

全体が6つのクラス（1クラス16人ほど）に分けられて授業を受けました。私のクラスは学芸、一橋、大阪、九州の4大学の生徒がいました。先生は現地の方で英語で授業が行われましたが、先生の出身地も多様でイントネーションや発音の仕方が違いました。平日は毎日8:30から13:00前まで授業があり、午後は基本的には自由でしたが、数人の英会話形式の授業が割り当てられたり、選択の講習を取ったりする形でした。授業の内容は、1週間ごとにテーマが設定され、テーマに沿って簡単なレクチャーの後にディスカッションをする形式でした。ラップトップを使ってパワーポイントや課題プリントをダウンロードして見ていました。それなので、説明会で言われるとは思いますが、ラップトップ持参は必須となります。週に一回はエッセイの課題がありましたが、テーマは授業の内容に即したものとなっており、文字数もそこまで多くはなかったので負担だと感じることはなかったです。発表も4週間の間に3回ほど設けられていて、最終週には個人のプレゼンテーションとグループのプレゼンテーションがありましたが、その前の週の授業時間内に準備の時間や発表の練習の時間を設けられていたので、普通に授業を受けていれば放課後や休日の間にずっと課題をしなければならぬといったこともないと思います。個人的には第1週で出された調査を伴う課題で、現地人の知らない人に質問することが必須であったわけではなかったのですが、現地の知らないオーストラリア人に質問をするなど、現地人と接する機会もあったので良かったと思います。また、先生がそれぞれの課題やレクチャーが終わった後に、質問があるかどうかを毎回聞いてくださったので、授業の内容が分からずにおいていかれる心配もしなくて大丈夫だと思います。

放課後や休日

先ほども述べましたが、放課後は基本的に自由なのでクラスの友達と毎日出かけていました。モナシュ大学はとても広いので大学内を散策したり、近くにあるショッピングモールやビーチ、シティに行ったりするなど半日だけでも出かけられる場所は多かったです。オーストラリアは夏～夏の終わりだったのでビーチにも行きました。ビーチはセントキルダ、チェルシー、ブライトンと家から電車やバスで行ける距離に3つのビーチがあり、それぞれ景色や特徴が違って楽しめました。週末には、お祭りや動物園、観光地など普段は時間がなくて行けないような場所に行きました。グレートオーシャンロードにはバスツアーを申し込んで行きましたが、ツアー前日の夜22時にキャンセルされてしまい、他にもツアーをキャン

セルされた人もいたので申し込む際には会社について調べるなど気をつけたほうがいいかもしれません。(評判が良い会社を選んで申し込んだのですが…) 前日にキャンセルされてしまいましたが、私たちは当日のピックアップの場所に行ってネゴシエーションをして違うツアーに乗せてもらったので、時には諦めずに交渉することも重要になると思います。グレートオーシャンロードの景色は本当に綺麗でした。また、動物園も日本にはいないような動物がいて楽しめました。

生活全般

基本的にはホストファミリーがご飯を用意してくれるので家でご飯を食べていました。ホストファミリーはホストマザーとホストファザーと犬が一匹で、毎日家に帰ると 20 分ほど犬と遊んでいました。ホストファミリーは料理がとても上手で、あらゆるジャンルの料理を作ってくださったので、毎日のご飯がとても楽しみでした。後でも述べますが、オーストラリアはバックグラウンドが多様な人々が暮らしているので、クラスの中だけでも中国系、マレーシア系、スリランカ系、インド系など多様なホストファミリーがいました。通学はバスと徒歩で 40 分ほどで乗り換えもなく通いやすかったです。家からバス停までは 15 分ほどで、帰る際には連絡をしていたのでバス停まで迎えに来てくれることも多かったです。大学から帰る時間と買い物の時間がかぶると近くのスーパーに連れて行ってくれたので現地の生活を身近に感じることができました。夕食の時間は 18 時から 19 時の間だったので、毎日それまでに帰るようにはしていました。オーストラリアは数年前に深刻な水不足があったこともあり、水を大切にすることがあったので、家のルールは特になかったのですがシャワーや洗いをするときなどは節水を意識するようにしていました。夕食前には現地のニュースを見て、食後には毎日 1 本ずつ一緒に映画を見ていたので、ニュースの内容や映画のあらすじをホストファミリーと話したりして、リスニング能力を身につけられたと思います。また、政治関係の会話などで日本はどうか説明することがあったりしたので、日本について簡単な英語で説明できるようにして、それに対する自分の意見も持つておくと、会話も進んで良い関係を築くことができると思います。休日は予定がない日には、車でしか行くことができないような地元の人々しか知らない観光地に連れて行ってもらったので、あらかじめ大体の自分の予定を数日前から伝えておくと良いと思います。

終わりに

自分が留学に行って、最も感じたのは自分の想像以上にオーストラリアは多様な人々がいるということです。実際に現地に行って、これは一定期間現地で生活してみないと分からないことだと感じました。そして現地の方々はとてもオープンで買い物をしている間にも他のお客さんと会話を楽しむなど日本との違いを非常に感じました。英語のスキルとしては、日常の会話から自分が考えている少し専門的なことまでを説明する力がついたと思います

が、一番はリスニング能力がついたと思います。留学を終えて思うのは、やはり現地に行って実際に感じないと得られないことを得ることができ、非常に充実した4週間だったということです。メルボルンは非常に過ごしやすく、行った翌日から永住したいと思うような場所だったので、留学に悩んでいる人は是非参加してみてください。



グレートオーシャンロード→
←マウントダンデノンからの景色



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1810231 佐久間 菜緒

授業内容

授業は基本的には平日の午前中に2時間×2コマありました。クラスメートは16人で全員日本人でした。1週間ごとに授業のトピックが決められていて、1週目はホームレス、2週目は環境問題、3週目は多文化主義、4週目はグローバル化がトピックでした。授業形式は、講義は少なく、ペアや4人グループになって話し合うことが多かったです。授業で発言する機会も多くありましたが、アットホームな雰囲気です。授業が進められていたため、失敗を恐れずに発言することができました。授業では必ずムードルを使うので、パソコンは必須です。私が4つのトピックの中で一番興味深かったのは多文化主義でした。研修に参加する前から、オーストラリアは日本に比べて多文化主義が進んでいるということは聞いてはいましたが、国籍による区別をほとんどせずに、お互いを理解し合おうという社会がオーストラリアではしっかり出来上がっていることに驚きました。課題は、2つのエッセイと3つのプレゼンがありましたが、授業中に準備する時間があつたのでそこまで負担にはならなかったです。

午後は時々会話の授業や希望制でワークショップなどがありました。会話の授業は生徒4.5人に対して先生が1人ついて、生徒の会話を中心に進められていったので、とても良い英会話の練習になりました。私が参加したワークショップでは、第二言語として英語を学んで話せるようになるにはどう練習したらよいかに関する講義があり、教科書通りの英語を話そうとしていては会話はできるようにならないし、ネイティブも教科書のように話していないということで英語の教科書とネイティブの会話を比べるなどしてとても面白かったです。

課外活動など

プログラムの一環でフィールドトリップが2回あり、1回目はメルボルンのシティーに行つて、マーケットを見たり、ホームレス問題について学んだりしました。マーケットは様々な国の食べ物が売られているので、多文化を感じることができました。同じ場所で毎週水曜日の夜に夏限定でナイトマーケットが開かれていて、そちらにも行って見たのですが、昼間より多くの国の食べ物が出店されていて雰囲気もお祭りのようで楽しかったです。Big Issue というホームレスの方が作った雑誌を販売することなどを通してホームレスのサポートをしている団体の方の話を聞きに行つて、実際にホームレスを経験したことのある女

性的の話も聞くことができ、勉強になりました。2回目は3つの行き先の中から自分が行きたい場所を選ぶことができ、私はチョコレート工場と動物園に行きました。自分で行くのは少し大変な場所だったので、フィールドトリップという形で連れて行ってもらえてよかったです。

土曜日にクラスメートとツアーを予約して、グレートオーシャンロードに行きました。ここで見た海の景色は絶景で写真でみるより何十倍も綺麗で、遠いしツアーなのでお金もかかりましたが、行ってよかったです。海以外にも野生のコアラも見ることができて楽しかったです。日曜日にはホストファミリーが海や山に連れて行ってきて、そこで子供たちと遊んだのも楽しかったし、旅行ではできない経験ができたと思います。

生活全般

私のホストファミリーは両親と5歳と9歳の娘さんの4人家族でした。私にとって初めてのホームステイで行く前は1ヶ月滞在することに対してかなり不安で緊張していましたが、ホストファミリーは本当に優しくていつも何か困ったことがあったら相談してとってくれたので、心強くて、行く前に感じていた不安はすぐなくなりました。ホストファミリーはマレーシア出身で、オーストラリア料理以外にもアジアの料理もたくさん食べられて、どの料理もとても美味しかったです。カンガルーの肉など初めて食べるものにも挑戦できてよかったです。オーストラリアは日本に比べて水が貴重なので、シャワーの時間は注意する必要があります。私のステイ先では何分以内にシャワーを済ましてほしいと頼まれることはありませんでしたが、できる限り素早くシャワーを済ませていました。洗濯も1週間に1回しかできなかったのも、気になる人は多めに服を持って行く必要はあると思います。メルボルンの気候は1日の中でも寒暖差が激しいので、長袖の上着を何枚か持っていった方がよいと思います。私はもっと暖かい服装を持っていけばよかったですと後悔しました。ただ、基本的に現地でなんでも買えるので、必要だったら現地で購入するのでもいいと思います。家から学校までは私の場合は家からバス停まで徒歩25分、その後バスで20分くらいかかりました。家からシティーまでは1時間半くらいかかったので、少し遠かったですが、私が住んでいた場所は治安も良く街並みも綺麗で良い場所でした。ホストファミリーの会話はスピードが速くてなかなか入り込むのが大変でしたが、私に話しかける時は発音をはっきりして話してくれ、私の拙い英語にもしつかり耳を傾けてくれたので、たくさん会話することができました。子供達とは何回も遊んで良い思い出が作れました。家族みんなが日本が大好きだと言ってくれたのが嬉しかったし、今度は日本で会いたいと言ってきて本当に嬉しかったです。特にホストマザーがたくさん日本を褒めてくれたので、私自身も気づいていなかった日本のいいところや、海外の人から日本はこういう風に思われているのだというのを学ぶことができました。ホストマザーが子供達にはオーストラリアで生活しているか

らといってオーストラリアの考え方に縛られて生きるのではなく、視野を広げて様々な国の良いところを吸収してほしいと言っていたのが印象的でした。ホストファミリーとの生活が本当に充実していて、一生忘れられない1ヶ月になりました。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 文科学科

1910114 内田早紀

1. 授業内容

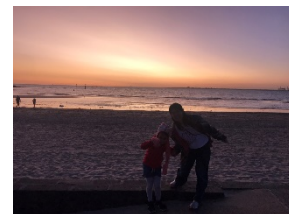
週ごとのテーマをもとに、講義・ディスカッション・ディベートなど様々な形式で、椅子を移動しながら自由にクラスメイトと意見を多く交わした。日本語でも答えるのに悩む問題を英語で答えるのはとても難しかった。授業中は、分からない単語は辞書で調べるのではなく、先生が英語で説明してくれるので、意味を確認するだけでなく使い方やニュアンスを知ることができ、印象に残りやすかった。ホームレスについて学んだ週では、実際に支援をしている方のお話を聞きに行くなど、関連したアクティビティが含まれているのもただ講義を聞くだけでなく面白かった。



日常の課題であるクラスフォーラムへの投稿は、先生が出す問いに各自が答え、その投稿にまた誰かが返信するという形式で行われた。私のクラスは一週間での投稿数が90個にもなり、とても活発な議論が行われた。自分が投稿するだけでなく、他の人の投稿にもコメントするので意見を知る機会にもなるし、英語の表現の勉強にもなったと思う。

2. 生活全般

多種多様な人が生活しているオーストラリアでは、生活様式も各家庭によって大きく異なっていた。クラスメイトと話していると、その差に驚くことも多かった。私のホスト先は、フィジー諸島生まれ・オーストラリア育ちのホストマザーの家だった。シャワーとトイレも自分だけのものが用意された二階建ての一軒家で過ごした。リビングで過ごす時間も部屋で休む時間もとても楽に過ごせた。それは、ホストファミリーが私を特別扱いすることなく楽に接してくれていたからだと思う。他人が同じ屋根の下で暮らしていても、見栄を張ることなく、時には子どもを叱りリビングでくつろぎ、食事をして普段通りに生活をしていた。食事は、朝は各自で用意し、昼食はサンドウィッチなどのお弁当、夕食はロティなどのパンとタイ米の主食とおかずでワンプレートが基本だった。



私の家族には5歳のホストシスターもいた。とても可愛い彼女から学ぶことも多かった。常にパワフルでアルファベットや数字を一生懸命に勉強していた。家族で週末に海辺にサンセットを見に行ったことと、動

物園に行ったことは良い思い出だ。いつもは子供を寝かしつけて一緒に寝てしまうが、金曜の夜だけはホストマザーも少し夜更かししてリビングで紅茶を飲みながら色々なことについて話したのも忘れられない。

平日の午後や週末は友達の色々なところに出かけた。海や city、ショッピングセンターなど回るところはたくさんあった。カフェ文化のあるオーストラリアではコーヒーとケーキも美味しくお茶もよくした。

3. 課外学習

基本的に授業は午前中で終わりだが、フィールドワークなどの課外授業や午後に自由に参加できる講義などがあった。フィールドワークでは、景色や食事など道中すべてが新鮮で興味深かった。クラス以外の人とも話すきっかけになった。午後の講義では、speaking は writing とは全く違うものだといった、英語の勉強についての話題や speaking を伸ばすためにはネイティブの相づちなどの自然な発話を学ぶべきといった話を聞くことができた。先生のお話もとても面白く、聞くことができてよかったと思う。

4. オーストラリアの文化について感じたこと

Multicultural について学ぶ週があったのだが、オーストラリアはまさにこの文化だと感じる場面の連続だった。町を歩いていても電車でもバスでも、多様な人種に驚いた。世界各国の人がいるのではないかと思うほど、色々なバックグラウンドがあった。電車の座席はボックス型で向き合って座るのだが、肌の色も宗教も関係なしに譲り合って膝を突き合わせていることがとても自然で素敵だと思った。

オーストラリアの制度についても色々知ることができた。働き方では、ホストマザーによると産休や育休、子どもが小さい間の時短勤務など制度が整っていると言っていた。彼女は子供を産んでも働きたいし、それを保障してくれない会社は国から罰せられるのは当然という。環境については水についての意識が高いことや、ソーラーパネルの援助など国も積極的に推進しているという。逆にそういった行動をとらないと、デモなど国民から非難の声がすぐにあがる。色々な面で、人々が社会を動かしているということを強く感じた。日本だと、一人が発言したところで社会が変わるのかと臆してしまうが、オーストラリアの人々はその距離感が近く、声が届くと行動している。人が集まってこそその社会であると強く感じた。



5. 留学をおえて

一か月の留学を終えて、英語学習に対する気持ちや生き方の価値観が少し変わったと感じる。英語の勉強は少し肩の力が抜けた気がする。例えば、課外授業でどこの英語を学ぶ

べきなのかという講義を聞いた。British English を学ぶべきなのか、世界で通用するのは American English なのか。では、Australian English は劣っているのか、はたまた Japanese English はだめなのか。留学にいて英語を勉強するならイギリスかアメリカがいいといった意見もよく聞く。しかし講義では、英語はもはや世界言語となっていて、英語を話す人の大多数はネイティブよりも第二外国語として話す人であり、どの英語が正しいということはない、ということを知った。Australian English も訛りや単語を縮めるなどのスラングもある。だけど、それは生ものである言語ならではの特征である。日本人は英語に対してコンプレックスを持ちがちではあるけれど、それを恥ずかしく思うことはないということを知って気持ちが楽になった。

オーストラリアの街並みはいい意味で混沌としていて自由だった。人種や宗教、性別など人を区別する要素は多々あるけれど、皆が同じ方向を向いていなくてもいいということを知った気がする。タトゥーをしている人が怖いなどの見た目に対する固定観念を自分も持っていることにも気づかされた。留学を終えて、日本に帰ってくると食事や文化など自分が慣れ親しんだものはやはり日本なのだなと感じた。日本の良さを改めて感じるとともに、ホストマザーに言われた「もし日本で働きづらいのならオーストラリアで働くこともできる」という言葉が将来の選択肢を広げてくれたと思う。日本が好きだけれど、ずっと日本にいる必要はない。そのことを実感できたことは大きな収穫だった。



モナシュ大学研修を終えて

文教育学部言語文化学科

1910219 川辺 菜月

学校生活

このプログラム中の一日のスケジュールは以下の通りです。平日は午前中のみ授業、午後は自由時間で、休日は終日自由時間。学校の授業は朝8時半から始まるのですが、自宅から学校までのバスの本数が少なかったため、朝は6時に起床し、7時過ぎに家を出るといった生活でした。毎朝起きる時間は早かったのですが、夜は学校の課題が終わったら22頃には寝るようにしていたので、寝不足は全く感じていませんでした。授業は、途中で15分の休憩を挟んで120分の授業が午前中に2コマありました。日本の各大学から集まった約90人の生徒を約15人ずつの6クラスに分け、それぞれのクラスをモナシュカレッジの先生が2人ずつで担当してくださいました。授業はすべて英語で行われ、生徒同士の会話もクラス内であれば英語で行うことが求められました。授業内容は、週ごとにテーマが設けられ、国際社会で起こっている問題や、オーストラリアの文化、社会、歴史について学びました。このプログラム中の授業に関して強く覚えているのは、考えを英語で伝えることの難しさです。授業中、生徒同士でディスカッションする機会が多く設けられていたり、先生がランダムに生徒を指定し、考えを述べさせることが多かったです。その際、事前に文章を英語で頭の中に用意していない状態で発言することが特に難しかったです。日本にいても、英語でプレゼンテーションをする機会はACTの授業で何度かありましたが、その場合、事前に原稿を考えているので、このような難しさは経験していませんでした。しかし、一ヶ月がたつと自然と口から出てくる言葉も増え、発言する前に以前ほどためらうことがなくなりました。微妙な成長ですが、「英語に自信がないから発言できない」というマイナスな思いが減っていくのが感じられて嬉しかったです。

ホームステイ

私がこのオーストラリアのプログラムを選択した理由の1つは、ホームステイができるということです。現地の文化をよりリアルに体験でき、また、英語を使う機会も、学生寮などに滞在する場合より多く持てるのではないかと思ったからです。実際、その目的を果たすことができました。授業で、オーストラリアの多民族性や、移民の歴史を学んだのですが、私のホストファミリーも中華系のご家族であったように、友人のホストファミリーも実に多様な国のご出身でした。なので、昼食に持たしてくれるメニューにその民族性が見られたり、晩ご飯の話をするとなんかそれぞれ食べているものが全く違ったりし、とても面白かったです。また、それぞれのホストファミリーがいつ、なぜオーストラリアに移住してきたのかを尋ねて

いる友人も多く、私も彼女らからその話を聞くことで、授業や移民博物館からだけでなく、より身近なところから、オーストラリアの歴史や社会についての理解が深まったと感じています。

英語を使う機会に関しても、なるべく多く持つように意識しました。ホストマザーには、一日の出来事をうまく伝えられるように帰りのバスの中で大まかにまとめ、尋ねられても慌てることのないように意識しました。また、ホストマザーとは料理が共通の趣味であったため、食事の際にそのときのメニューについて作り方を尋ねたり、彼女の出身地である中国の食文化についても質問をしたりしました。また、大人の方と話す際には自分の英語力に自信が持てず、少し消極的になってしまいがちだったので、なるべくホストシスターやホストブラザーと会話とすることで、そのような心理的負担の軽い状態で英語を使うことができました。

留学を終えて

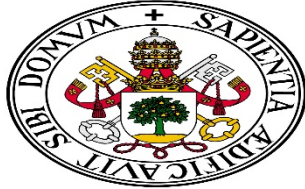
今回の短期留学を終えて、英語学習や長期留学へのモチベーションを上げることができ、また同時に必要性も感じました。入学当初、長期留学をしたいと思っていたものの、なかなか動き出せずにいる自分の背中を押し、英語力を向上させることにより強い意欲を持てれば良いなと思い、このプログラムに参加しました。そして、一ヶ月間、日本にいるときとは違う環境に身を置くことで、新たな視点から自分について様々に見つめ直すことができ、日本にいるままでは気がつかなかったような発見をすることができました。そのうちの1つが、「人と話すことが好きだ」という発見です。明るく、おしゃべりが大好きなオーストラリアの人々や、積極的にコミュニケーションをとろうとするプログラムの参加者に囲まれ、一ヶ月の間でたくさんの人とたくさんのことを話しました。その中で、「私は人と話すことが好きなんだな、もっといろんな人と出会って、いろんな話を聞きたい、知りたい」と思いました。しかしそのときは英語力への自信のなさや、単に言葉をうまく組み立てられないことで、会話を発展させられなかったり、知りたいことを聞けなかったりすることも多く、それをとってももどかしく感じていました。なので、より長期で留学をしたり、日本においても積極的に英語学習を継続したりし、より多くの人と会話を楽しめるようになりたいと強く思いました。そのようなポジティブな発見ができ、この一ヶ月間はとても有意義だったと感じています。



(↑ホストファミリー宅での普段の食事の風景。ホストマザーは中国出身の方だったため、主食は米。他の料理の味付けも、日本人になじみのあるもので、どれも美味しかった。)

(以下2つ↓ クラス全体の集合写真。)





Universidad de Valladolid



バリャドリッド大学（スペイン）

研修期間：開始日・期間選択制

滞在：ホームステイ/大学寮

研修内容：スペイン語研修、スペイン文化学習

バリャドリッド大学研修を終えて

理学部 数学科

学籍番号 1920103 大橋会莉

授業内容

事前にクラス分けのテストを受け、自分のレベルに合った授業を受けさせていただいた。私は今回の留学で3種類の授業を受けた。1つ目は、スペイン語の文法について学ぶ授業だ。マンツーマンの授業を受けることができ、自分の学習状況に合わせて授業を進めてもらうことができた。2つ目は、スペインの文化について学ぶ授業だ。この授業は、日本の他大学から来ていた2人の学生と一緒に授業を受けた。スペインの政治や、食文化、芸術などの幅広い内容を学ぶことができた。3つ目の授業は、グループでコミュニケーションを学ぶ授業だ。20名程度のクラスで、世界中から集まった生徒で授業が行なわれた。机は常にコの字型で行なわれ、先生と生徒、そして生徒間でもコミュニケーションが取りやすい形になっていた。授業では先生が全員をランダムに指名し、みんなに発言する機会を与えてくれた。他国からの生徒は、疑問に思ったことを授業内ですぐに先生に質問していたことが印象的だった。本人の疑問が解消されるだけでなく、周りの生徒にも学習の機会を与えられる行動であることを強く感じた。クラスの中で私は最年少だったが、40代で現在先生を勤めている方も一緒に授業を受けていた。多様な背景を持つ方々と授業を受けたことで、自分の視野を広げることができた。3種類の授業それぞれから違うことを学べ、とても充実した勉強をすることができた。



課外活動

バリャドリッド内の教会や博物館を探索する課外活動があった。これは、文化の授業の延長で、作られた年代や特徴をもとにどこの施設を表しているかを推測し、グループでその場所で写真を撮り、全ての場所に行った後先生に報告するものだった。特徴が示されている文を理解するところから難しく、グループの人と考えたり町の人に質問したりしながら、この取り組みを終えることができた。この授業後、先生とグループの人とスペイン料理のセピアとチョコレートをいただいた。

バリャドリッド大学内に、日本語を教えている授業があることを知り、その授業に参加させてもらった。外国人に日本語がどのように教えられているのかを全く知らなかったのも、それを知るととても良い機会になりました。授業内では、スペイン人の方に日本語の使い方の

アドバイスをしたり、日本の文化について説明したりした。授業の最後には、スペイン人の方は日本語で、私はスペイン語で、お互いに質問をすることを行なった。日本に興味を持っている方が多く、日本人であることが誇らしいような気持ちになった。貴重な場に参加でき、とても楽しかった。

生活全般

スペインでの生活で、日本との差を大きく感じたところは食生活だ。私はホームステイ先で、8 時頃に朝ご飯、14 時半頃に昼ご飯、21 時頃に夜ご飯という生活を送っていた。日本よりも、日が昇る時間帯が遅い印象があったので、それが影響しているのではないかと思った。23 時頃になっても比較的明るかった。私のホストファミリーは、おばあちゃんが1人で住んでいる家庭だった。終末には、娘さんと8歳の孫の男の子が遊びに来ていたので一緒に遊んだ。事前に調べていたスペイン料理の写真を見せて、食べたい料理の話をしてから夕食の際に作っていただいた。



留学全般

私は、留学開始予定日から留学を始めることができなかった。事前に飛行機を自分で取り、万全に準備していたつもりだったが、帰国日から3ヶ月分のパスポート有効期限がなかったのだ。成田空港で飛行機に乗れないことがわかり、留学の計画がゼロからになってしまった。その際に、パスポートの更新をし直して今の時期に行くのか、また次の休みを利用して留学に行くべきか何度も考え直した。コロナウイルスが流行し始めている時期であり、時期を改めて留学に参加する選択肢も十分にあり得た。しかし、今回参加して良かったと本当に思っている。今行かなければ出会うことができなかったかもしれない先生、友達と巡り会え、今回の留学を逃さなくて良かったと強く思った。コロナウイルスが日本、アジアで流行していることがあり、町を歩いていて度々差別を受けた。私は初めて差別を経験した。私よりも前からスペインに留学している台湾と中国からの留学生達は、私よりもスペインでの差別に苦しんでいた。アジアでコロナウイルスが流行する前から、スペインにいるのに人種で判断され差別を受けていたのだ。コロナウイルスの対策をしなくてはならないという思いが複雑に関係しているので、一概にアジア人を避けることが悪いとは言えないのかもしれない。しかし、差別を受けた人は傷つき、嫌な気持ちになるということを忘れてはならないと感じた。

最後に

一部の人の差別はあったものの、バリエドリッドの人は、気さくで優しい方が多かったと思う。町を歩いていて、天気がいいね、などと声をかけてくれたり、移動の際に大きな荷物を抱えている私に優しく手助けをしてくださったりする方もいた。大学で知り合った友達に、おいしいお店を紹介してもらい一緒に行ったり、電車に乗り近くの観光地へ旅行したりすることもできた。今回の留学は、初めて1人で海外に行き、大変なことも多々あったが、国際教育センターの皆様をはじめ、大学で出会った方々、ホストファミリーなどからの多くの支えがあり、無事に留学を終えることができた。本当にありがとうございました。この経験を糧に、また他の国へ行き、新たな挑戦をしたいと思う。





**UNIVERSITÉ
JEAN MONNET**
SAINT-ÉTIENNE



ジャン・モネ大学（フランス）

研修期間：2020年2月24日～3月20日（4週間）

滞在：大学寮

研修内容：フランス語研修

キャンパスフランス研修を終えて

文教育学部言語文化学科

1910259 野上 真以

授業内容

渡航前のオンラインテストと初日に現地で行う面接を参考にクラス分けされました。授業は主に2種類ありました。ひとつは毎日あるフランス語の授業で、文法を確認しながら、挨拶やお店でのやり取りを想定した会話や物の描写の練習などを先生やクラスメイトと実践しました。会話、聞き取り、書き取りとバランスよく配分されていました。授業で習ったことをそのまま生活の中で実践できたので、フランス語が身についていく感じがしました。クラスには外国人の生徒もいるので、話してみると他の国について知ることができて楽しいし、フランス語も練習できました。もうひとつは週2のフランス文明の授業で、生活や文化についてフランスと日本を比較しました。宿題もありましたが、それほど多くなかったです。座学の授業だけではなく、クイズ大会やフランスのお菓子を作る時間もあって楽しめました。授業ではプリントが配られるので、筆記用具とノート、辞書があれば十分だと思います。ただ宿題や連絡など学校、先生個人とのやりとりにメールを使ったのでそのための端末もあるといいと思います。私はスマホだけ持って行きましたが、ノートパソコンやiPadを持ってきている生徒もいました。

課外活動

放課後には学校の近くの大通りに並ぶパン屋やスーパー、ショッピングセンターに寄って買い物をしました。特にチーズやパンは日本より安くて美味しいし、種類も豊富なのでおすすめです。週末には近くのスタジアムへ行って、現地チームのサッカーの試合を観に行きました。私はサンテチエンヌという町に住んでいたのですが、そこはサッカーが盛んな街で、試合の熱気には驚きました。日本語を学ぶフランス人の学生との交流会もありました。日本語がすごく上手で、刺激を受けました。

また自分たちで宿を手配してリヨン、アヌシー、パリを観光しました。移動手段や行き先のオススメスポットについては、ホームステイ先の家族や現地の学校の先生に相談しました。どこも見所が多すぎて時間は足りませんでした。サンテチエンヌとは違う雰囲気を味わえ、自分たちだけで動いたので行動力も身につきました。パリでは移動手段として地下鉄を利用しました。仕組みは東京に似ていました。10回券や1日券を利用すると便利だと思います。

生活面

私は 15 歳と 3 歳の娘さんを持つご家庭にホームステイをしました。このご家庭にホームステイする日本人は私が 6 人目で、とても過ごしやすく充実していました。ホストファミリーは買い物や映画館に連れて行ってくれたり、一緒にテレビを見てくれたり、家族のように接してくれました。一緒に車に乗っているときはゆっくり考えながら話すことができたので、たくさん会話できました。学校までは Tram という路面電車で 20 分間乗って登校しました。この時スリには気をつけるようにとよく言われました。荷物は自分の目に入るように持っていました。食事はホストマザーが用意してくれました。夕食をホストマザーのご両親の家で食べることもありました。ホストファミリーと出かける際は長時間車に乗ることが多く、フライトも 12 時間あったので、酔い止めを持ってくればよかったと思いました。洗濯は週に一回で、シャワーは毎日入ることができました。洋服類は一週間分持って行きました。買い物にはデビットカードを使って、新幹線の予約にはクレジットカードを使いました。ホームステイ先では Wi-Fi を使えましたが、週末に他の街へ出かけることも多かったので現地の携帯ショップで SIM カードを購入しました。

最後に

初めての海外だったので留学前は不安でいっぱい、先生や留学経験のある先輩にたくさん相談しました。でも行ってみたらなんとかなりました。不安もなくなって、とても充実していました。今回は新型コロナウイルスの影響で滞在期間が減り、学校での最後の発表やお別れ会、授業そのものも中止になり、不完全燃焼で終わってしまいました。でもホストファミリーや学校の先生方にたくさん助けていただけて無事帰国することができました。情報収集の大切さがわかりました。万が一の事態が起きてしまうこともあるとわかったこの経験も含めて、全部が貴重で新鮮な毎日でした。3 週間はあっという間で 1 日 1 日を大切にしようと思えました。いい出会いに恵まれて、いろんな人に助けられて、もっと成長したいと思いました。この留学に挑戦して本当に良かったです。



サンテチエンヌ



アヌシー

ジャン・モネ大学 (CILEC) 研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
学籍番号 1910275 森 優吏

授業内容

下のクラスだったこともあり、授業は既習内容ばかりであった。しかし、既習内容といえどもより実用的な場面での演習や、現地でしか用いない単語を学ぶことが出来た。

また、フランス人の先生がフランス語のみで授業を行うという環境は、やはり語学能力の向上において大きな要素であると感じられた。例えば質問をする際にもフランス語を用いなければならず、その応えもフランス語であるため、自ら学習しなければ疑問点を解消することも難しい。そのため学習意欲の向上にも繋がったと考えられる。

文化アクティビティ

映画を鑑賞した。自分と同じようにフランス語の分からない人達とともに見ることで、映画の流れを汲んで今の台詞はどのような意味か等、意見を交わしながら見る事が出来た。

お菓子作りを行った。フランス語で記されたレシピを用いたことで、普通に学習しているだけでは学ぶことが無いであろう単語を多く学ぶ機会となった。

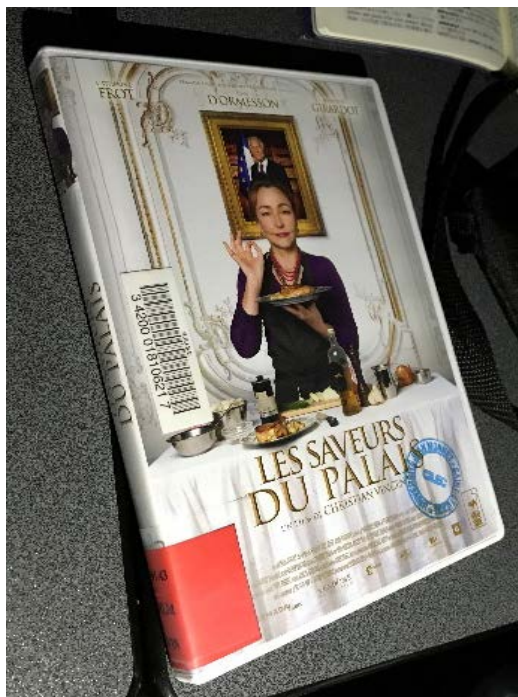
カードゲームを行った。無意識のうちにカードゲームは世界共通という意識をもっていたということが分かった。実際は既知のゲームはほとんどなく、その国特有のゲームや日本の“和”をテーマとしたゲームもあり、多種多様なゲームに興味を湧いた。

生活全般

ホームステイを経験することで、学校や寮では使用しない単語を多く学ぶことが出来た。また、ホストファミリーの方々のおかげで食生活や水回りの習慣に触れることができ、ひと月という短期間ではあったが様々なことを学び、経験した。

そして何より、ホストファミリーの方々との会話により、フランスでの挨拶における微妙なニュアンスの違い等、日本にいただけでは学ぶことの無い、もしくは学ぶことの難しいことも学ぶ機会となった。

以下、見た映画と日本では見られないほど多種多様なチーズである。



ジャン・モネ大学研修を終えて

理学部 物理学科
学籍番号1820209 折田 玲奈

【はじめに】

留学中にフランスのコロナウイルスの状況が深刻になり、予定されていた1か月より、急遽早く帰国しました。なので3週間までの滞在で体験したことをここに記します。

【授業内容】

1週間の大まかな予定はこのような感じでした。

	午前	午後
月曜日	クラス別授業	14h~15h30or15h30~17h 文化の授業
火曜日	クラス別授業	アクティビティ
水曜日	クラス別授業	14h~15h30or15h30~17h 文化の授業
木曜日	クラス別授業	文化施設訪問やプレゼンの準備など
金曜日	クラス別授業	自由
土曜日	自由	自由
日曜日	自由	自由

わたしのクラスは、日本人の学生は私含め5人しかいませんでした。私たち日本人以外の学生は、国籍も年齢もバラバラでしたがみんな仲が良く、短期間しかいない私たちとも気さくに話してくれました。授業で一番痛感したのは、「話せない」ということでした。授業の内容もわかるし、書くことは得意だけれど、言いたいことがすぐにフランス語で言えなくてもどかしかったです。一方、他のクラスメートは、先生が説明していてわからないところを質問したり、とても積極的でした。彼らの発言から吸収したり、だんだん耳が慣れていくうちに、少し自信が持てたので、先生が質問したときに一番に答えたり、積極的にがんばりました。彼らとの授業は刺激的で、成長するきっかけになったと思います。

第三週の木曜日の夜、突然、月曜日からフランス全土の教育機関が無期限停止になってしまい、次の日の金曜日がいきなり最後の授業の日になってしまいました。同じクラスで仲良くなった女の子たちと、クラスメートになにかお礼がしたいね、ということで手作りのプレゼントを途中まで準備していたのですが、次の日に急いで仕上げ、なんとか最後の授業で渡すことができました。みんなの似顔絵と日本語で名前を書いたら、これ私だ！という風に喜んでくれたので良かったです。



→これをプレゼントしました

【課外活動】

課外活動には、日本語を学んでいる学生とのパーティー、デザインのミュージアム訪問、フットボール試合観戦、フランスのデザートづくりなどが主にありました。あとは、現地の学生や家族などに向けた日本文化紹介の発表、お城への遠足、エンジニア系の学部の学生との交流、お別れパーティーが予定されていたのですが、コロナウイルスの影響でなくなってしまいました。特に、プレゼンテーションに関しては、グループのメンバーと放課後に集まって原稿やパワポを作ったり、先生に添削してもらったりと、頑張っていたので残念でした。

自主的な学習としては、初めて知った単語や、あの時言いたかったこれはどう言うのだろうか、と調べたものを毎日ノートにメモしていました。また、数日に1回ほど日記を書いて、先生に添削してもらいました。文法的には合っているけど、ネイティブスピーカーにとっては不自然な表現があることを知り、勉強になりました。他にも、宿題でわからないところを助けてもらったり、プレゼンテーションの添削もしてもらいました。なにより、これら聞きに行くうちに少し仲良くなり、雑談もするようになったことで会話力が少し上がったと思います。

【生活全般】（ホームステイ）

これから行く方のために、困ったことやアドバイスを書きます。まず、洗濯は週に1回が基本なので、多めに持っていくか、手洗いができるような洗剤を持っていくといいと思います。次に、家の中で履くクロックスがあればよかったなと思います。私のホストファミリーは靴でいたり靴下だったり様々だったので、靴下だと裏が黒くなります。それから、部屋が寒かったのが寒いのが苦手な人は防寒をしっかりしていくといいと思います。一応、部屋にchauffageという暖房があったのですが、調節を最大にしても寒かったです。

【週末について】

1回目の週末は、ホストファミリーと過ごしました。ホストファミリーの祖母の誕生日パーティーがあったのですが、親戚や友人の方々が大勢集まり、結婚式みたいに一人ずつ席が決まっています、出し物の進行プログラムもあり、想像より豪華で驚きの連続でした。カラオケをしたり、生の演奏に合わせてみんなで踊ったり、楽しい一夜を過ごしました。

→パーティーの写真



2回目の週末は、お茶大の友達とAnnecyという地方のとてもきれいな小さな町に行きました。初めてBlaBlaCarを利用したり、ホテルの予約、TERのネットでの購入、など初めてのことでいい経験になりました。

【まとめ】

フランスでの生活や言葉にも慣れてきて、あと1週間でもっと成長するぞ！と意気込んでいたところだったのと、友達や先生方にきちんとお別れができなかったのが、後ろ髪ひかれる思いで帰国しました。ですが、短期間でもやる気次第で、語学力は上がることを実感しました。この研修でフランス語へのモチベーションが上がったので留学後も勉強は引き続き頑張りたいです。予想外の事態はありましたが、この研修に参加してよかった、というのは強く主張します。研修を通して出会えた、友達、ホストファミリー、先生方、すべての人が大切な思い出です。最後に、ここには書ききれないのですが、ホストファミリーには本当によくしてもらいました。家族の一員として受け入れてくれたホストファミリーに感謝したいです。

編集後記

本学で、短期留学の何かしらお手伝いをさせて頂いて8年目となります。年に2回発刊される報告書を、「カルチャーショックに驚き！」（そう、そう。わかる、わかる。）「もっと準備しておけばよかった・・・」（そう、そう。後悔は先にたたないもんね・・・。）「海外短期研修は最高だった！」（その感想を聞けて私も最高！）と、お茶大生が現地で経験した苦労や葛藤、そして、驚きや出会いを、ひそかに楽しく読ませて頂いておりました。

ですが、2019年度春季海外短期研修は、これまでのお茶大短期留学史上未曾有の事態となりました。そうです、新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大の影響により、海外協定校の中には主催する派遣プログラムを中止したり、すでに渡航した一部の学生は緊急帰国せざるを得ない状態に陥ったりしたのです。当時、短期留学派遣プログラム担当教員であった鈴木芽以先生は、急遽現地入りし学生のケアに努められました。また、国際教育センター講師の松田デレク先生は、渡航先から緊急帰国することになった学生の帰国までの対応を24時間体制でなさっていました。

IT革新やソーシャルメディアの台頭で、世界や人が簡単につながるようになり、留学の意義が問われるほど世界が身近に感じていたはずの現代社会においても、物理的なコンタクトが実際に減ってしまうと、消費や企業活動が滞り、経済は麻痺し、教育の現場もストップしてしまうほどの打撃を受けました。

今回海外短期研修に参加したみなさんが、無事に帰国できたと聞いたときは心底安堵し、今、こうやって報告書を読んでいますと、みなさんが海外短期研修で得た現地での五感で感じた「リアルな体験」は、改めて貴くかけがいのないものとなり、将来の様々なシーンで活かされると信じています。

現在の“with コロナ”という「対面」が難しい制約条件は、新たな発明、価値や概念を生み出し、国際教育交流においても、世界を知るアプローチを無限に作り出すと考えています。当たり前が当たり前でなくなった生活の中だからこそ、これからの皆さんにとっては多くのチャンスがあると思っています。これからの皆さんにも、有意義な国際教育交流の機会を可能な限り提供していきたいと思えます。

国際教育センター アソシエイトフェロー
長塚尚子

2019 年度春季 海外短期研修報告書

発行日 2020 年 9 月
発行 お茶の水女子大学 国際教育センター
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
TEL: 03-5978-5913

研修・編集担当 国際教育センター
 アソシエイトフェロー 長塚尚子
 アカデミックアシスタント 崔 進栄

